

外山正一、缺字見、湖麩子



征
清
歌
集

東京博文館藏版



征清歌集

全

海軍主計總監奈良真志君題辭
東宮侍從勘解由小路實承君題歌
正四位勳三等藤島正健君題歌
佐々木信綱撰

東京 博文館藏版



海軍主計總監奈良真志君題辭
 東宮侍從勘解由小路資承君題歌
 正四位勳三等藤島正健君題歌
 佐々木信綱撰

征清歌集

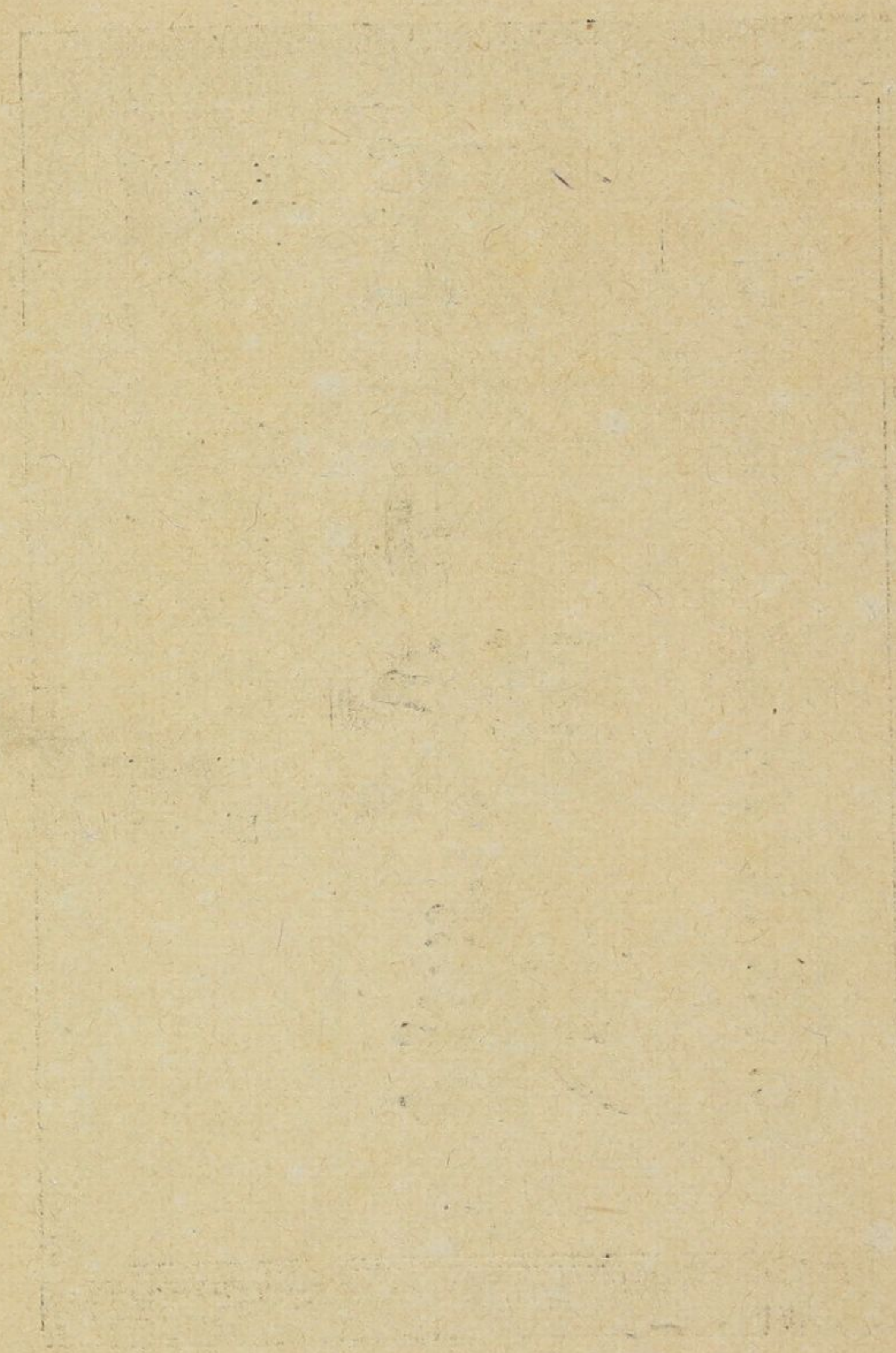
全

東京 博文館藏版

腐



懋



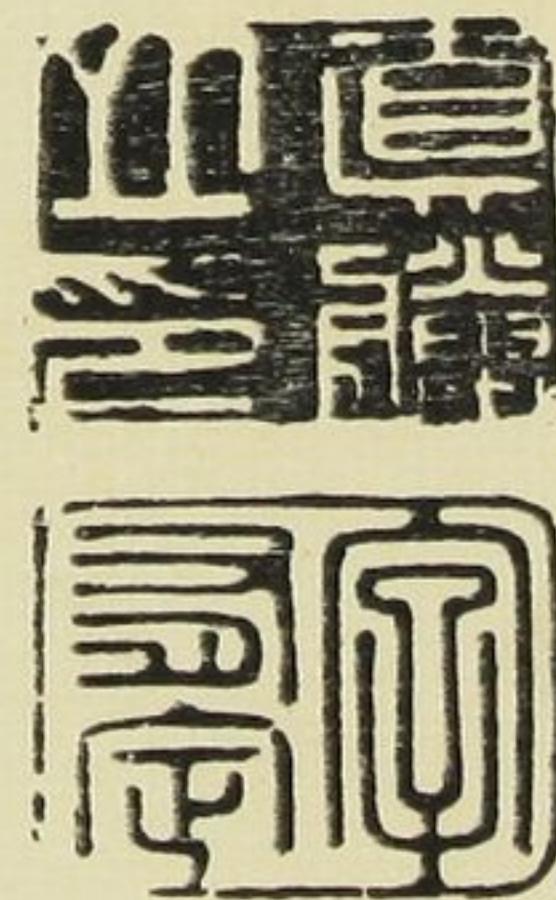
存



題

明治甲午九月

善行教人題



江清其水亦其水

其水其水

其水其水其水其水

其水其水其水其水

ひまわり
國方
ふ

あまのこ
ふ
ふ

征清歌集目次

短歌部.....一	陸軍大勝利の歌	海軍大勝利の歌	征清軍人の勝利を祈る歌
長歌部.....四七	九月十四日の作	賣炭賊	海陸勝利を詠る歌
	旋頭部.....五八		征清の歌
	從軍出願を詠る歌		
雜體部.....五八	征清の歌	進め我駒	往け日本男兒
	皇國の旗	朝鮮行	豊島沖
	喇叭の響	喇叭卒	拔牙山
	中和の朝嵐	平壤の大捷	軍中月
	黄海の大捷	捷報來	大孤山沖海戰
			奉天府
			我海軍
			軍艦操江
			宣戰の詔勅
			將軍不誇

天の下ありし
 かくはまきいぬらん
 正徳は元徳なる出らばし

進軍軍歌	出帥の初歩	盛軍の歌	赤十字社の歌
婦人従軍の歌	進軍の歌	偶感	生別
従軍を送る	渡韓を送る	雨後の月	夏の夜の夢
秋 曉	仲秋月	海上宴	紅 涙
祭南洲先生	従軍行	海戦大捷	國 風
歌へや歌人	征清の歌	征清軍歌	征清將軍
皇國の民	日本兵士	日清開戦の歌	朝鮮海
進軍々歌	攻 壘	我 國 歌	軍資献納の歌
初 紅 葉	對月思我兵	成歡戦の歌	松崎大尉
同	同	車駕親征の歌	平壤戦の歌
兄弟の兵士	平壤の捷歌	海陸の勝利	わたの艦
劍の光	大 勝利	形見の衣	幼き兵士
明日の戦	秋 夜	こよひの月	森の木陰
征清の歌			

征清歌集

佐々木信綱選

短歌部

大元師蠶下の廣島に行幸せさせたまふ日

東久世通禧

あきつ神わが大君のみみづから出た、します今日のかしこさ

山縣將軍を送る

勝 安 房

いさましき軍だちかなまつろはぬかたきをどきて早歸りませ
ほこ取てますらたけをら渡るらむありなれ川の浪たかしども
さしてゆくわが日の御旗あさかせに雲ふき拂ふ高麗の玄ら山

時事に感ずる事ありて

品川彌二郎

高麗人も唐土人もこゝろせよやまとつるぎのくもりなき御代

韓國に出師のさまをみて

異國の險しき路にすゝみゆくやまどごゝろのこまのをしさ

朝鮮の捷報をきし日盃を擧げてよめる

福 羽 美 靜

から國の虎ふす野べに天皇のひかりをはなつ今日のめでたさ

清國と宣戰の詔をよみて

國のため死せよと君がのらします大御心のたかくもあるか

萬民の心になり代りて

教ある國の民ぞといはるべき行ひ見するときは來にけり

ゆく人もどゞまる人もくにのためとも力をいざつくしてむ

滿清王が出したる宣戰の書を見て

いふ事いかに巧につくれどもねぢけしかげは隠しこそえね

滿清王が將來を思やりて

見し夢のねぶりもさめてひざまづき何處の人の蔭たのむらむ

連戰連勝の報を聞て

黒 田 清 綱

此秋いとわたる鴈のおどづれをきくたびごとに嬉しかりけり

寄道言志

もろこしの虎ふす野べの果までも開きてしかなえさしまの道

征清の我軍を思ひやりて 藤 島 正 健

みいくさのみいつの風に唐土の野山の草木靡さふすらむ

皇軍平壤略取の大快報を得て 長 谷 川 貞 雄

淵も瀬も敵の屍にうめたてゝ大同江をかちわたりけむ

時は中秋望月の頃にあり

ものゝふのかさす劍に影さえて月に聲あり平壤のあたり

果して到れりわが海軍の大捷報

黄海にさかまくなみをやぶりつゝ皇軍艦のいまぞすゝめる

渤海にひそめる黄龍をどらへ來て君にさゝげむ時近づきぬ

天つ日の御旗かゞやくいくさ艦むかふ海に起つなみもなし

朝鮮の禮なきを憤りて

丸山 作樂

古へのかゝるためしもありなれの川さかしまに流れやのする
から國のこきしがどもをみまかひのやつこと呼し事も有しを
おもふことなしもをへずば韓國の虎ちふかみに骨かませまし

京城に進發する朝

陸軍大尉

田上

覺

かねてより君にさゝげし我身なり今朝撰ばれて死する嬉しさ

威海衛に向はんとして月夜なりければ

外征海員

某

心地よや見わたす空も雲はれてつるぎを照す月さやかなり
いたづらに萎みし果をたれかめでんちるこそ花の譽なりけれ

從軍願を陸軍大臣に呈し命の下るをまちるける時述懷を

休職陸軍大尉

山代

清三

みかくべき時は今なり國のためかねてをさめし日本だましひ
時しりてちるも花なり人もまた花となりつゝ名をとゞめまし

宣戰の大詔を拜讀して

小中村義象

青ぐものかべたつきはみ日の御旗おし靡かさむ時は來にけり

偶感

落合直文

耳塚のありてふ事をまつるはぬからのえみしに聞せてしがな

偶作

坂

正臣

低けれど高げにはこるから獅子のその鼻ばしら打くだかばや
風はまだ身にしまねどもから衣うつべき秋のちかづきにけり
雞のはやしの雲のうちにはなつわがみいくさの火矢のけぶりか
から人をうつにはあかで皇軍は虎やかるらしもろこしの野に
いざといひて筆は投ても銃取てうつ術知らぬ身をいかにせん

宣戰令の出たる日つゝしみて詠める

與謝野

寛

えみし討つ詔勅はいでぬ大地もてる日にさくるみな月のそら
さゝげよむ小手に涙ぞこほれける神の御聲のこのおほみこと

古にためしもきかぬ御軍をよそに見てあるときならなくに
時ぞとてふるひたゝずばこの御代に生れ遇たる詮やなからむ
筆とらばその筆をもて太刀とらば其太刀をもていざ仕へてむ
死も生もさもあらばあれ大君の御言のまゝにゆくべかりけり
からのやつこ憎さも憎し一度はわがこの太刀を免がるべしや
いにしへに何かゆづらむ耳塚をふたゝびつくも程ちかくして

大元帥陛下御親征の御發輦を拜み奉りて

靖國神社社司 賀 茂 水 穂

いでましの稜威かしこし朝風にしきの御旗にしにむかひて

千 葉 胤 明

いでたゝす大御輦のひゞきにぞ高麗もろこしもゆり崩るらむ
羨し今日いでたゝすみをさきに仕へまつれるますらをの友
萬代とことほぎうたふ聲のうちは大みくるまは轟ろきにけり
いくさ人いさむが上にいさむらむ龍につばさのそふ心地して

みくるまの過る大路はつるぎもて垣根ゆひたる心地こそすれ

我皇軍の捷報をきゝて 前 田 夏 繁

ふき拂ふわが山風のはげしさにからかでしこは色ものこらず
成歡牙山の勝利のごとくなほゆくさきのたゞかひにも我
皇軍のむかふ所風靡せざる所なからむなと人と物語した
る時よめる

たけ雄らのいぶきに折れぬ草をなみ行手やすけき諸こしの原

我軍の大勝利をきゝて 原 田 嘉 朝

日の旗の御旗の風にから山の草木いなべて打なびきつゝ

清國征討の軍人におくる 館 忠 資

ことさへぐからは物かは獸をすこと國とほくまつろはしてむ
大君の御楯とならむ世をまもる神のみするおほやしまびと
おほきみのみたてならばと思ふこそ我國ぶりの寶なりけれ

我軍の大捷をきゝて 美濃部 貞亮

大君のみいつの風になびくなり高麗の荒野の千草百草

吉田 謹爾

み軍のいたる所はむかふあたむかふすなはち打やぶれつゝ

月清き夜遠征の我兵を思ふ 角田 佳一

月かげのさやかあるにも思ふかないかに見るらむわが軍びと

小原 直治

くもりあき今夜の月をますらは高麗の荒野に打あふぐらむ

海軍の捷報をきゝて 田崎 孝榮

れひうちてたゞかふごとに打つ筒の煙となりぬもろこしの船

海陸の捷報をきゝて 森 朗路

海山もなみ風たゝず日のもとの御旗てらさぬどころしもなし

辻 和平

あたの都やかてぞ取らむみ軍の海にくぬがに打やぶりつゝ

陳思 森 和平

われも又若くしあらば御軍のみはたさゝげて進みてましを

大勝利の報を得て 稲田 佐之

戦へばすなはちかちていくさ人苦しき中にたのしかるらむ

戦死者をいたみて 笹村 良昌

君がためさらすかばねにむす草の花のさくらの色にさくらむ

日清戦争につきて 池袋 清風

日の本のひかりを早く見せなむむまだ夜を殘すもろこしの原

思ふ事ありてよめる中に 原 宏平

はれぬべき雲ならんやは天地もふりとゞろかせ夕だちの雨

もろこしの吉野の山にわかくにの櫻もうるよものゝふのとも

我子海軍大尉西紳六郎の某艦にのりて朝鮮海にあるもと

に 西 舛 子

あら波の中になつとも大八しまやしまの神のまもる船あり

國の爲いさぎよき名をつとにして功あらはしかへりきなむ

思ふこゝろを

森 策 子

虎はゆる高麗野の薄きりふせてやどとをのこの狩場にぞせむ
いくさ人わたの都をどくせめて日かげかゝやく御旗かゝげよ

東學黨に代りてよめる

勝 安 房

わが屍草いむすともいたづらに管杖のもとにわに死なめやも
まひたげし管杖のもとにたへじとや草葉の末を赤くそむらむ
もろ人のなみだつきさばもろ人の國の大臣の血をやすゝらむ
天によび地に叫びつゝいまいとてひらめく劔たれにくはへむ
心してみさをさしてよ風あるゝありちれ川にたてるあだなみ
水や空くがちもわかぬ北の海に羽をのす鳥のちにあさるらむ

東學黨

鶴 光 美

稻妻のひかりをりゝあらはれて雲間もすこきゆふだちの空

日本軍艦仁川港にいたる

汐さわぐみななどの月夜ものゝふの舟よぶ聲のいさましきかな

日兵入京

岩 田 操

天つ日の御旗さゝげて太刀はきてからの都をねるゝ誰が子ぞ

危機一髪

鶴 光 美

雨ふらむ空にちかくもなる神のいつはた中におちんとすらむ

清兵牙山を發す

なかゝくに動くけしきも見えざりし大木のこずる風吹わたる

曠日持久

失 意 生

楯なめて知らぬ荒野にものゝふが戦はずしも幾日経ぬらむ

大鳥公使

會 田 安 昌

大どりの羽風にあひてくだかけのすめる林のうごきけるかち

三橋

中 雄

くだかけの群にいりても天がけるつるの翼のたゆまざりけり

甲

秀 輔

はびこりし高麗のまこ草ねを絶ちて移し植ゑたる園のまら菊

折衝生

おぼどりのみ空をおほふ翅にはあらそふ龍もかひやなからむ

大御ことにより大鳥ぬしの朝鮮にとまりけるとき

三橋中雄

天がける鶴の羽かせには鳥のはやしに如何に涼しかるらん

清廷虚威 日本生

雨よばむけしきだもなしあはれく姿ばかりの龍の身にして

閔族處刑 北田梅仙

さやぎつゝまげる醜草かりそけて鶏のはやしに根をな留めそ

豊島海戦 長谷場致堂

一聲の矢玉にまづむから人のそのありさまのもろくもある哉

豊島沖 小林角次

から國のをぶね沈めつうちやりつ浪の音たかし高麗の海ばら

豊島海戦の勝利をことほぎて 大野泉

皇軍にあたなへばこそわたつ海の泡となりしかもろこしの船

濟遠廣乙の二艦逃走せしを 小林正和

網の目にかゝりし魚も一度はもれ出てこそ遁げはしりけれ

豊島沖海戦の時の濟遠號を 會田安昌

あた浪はうちも向はで大舟のそこはかどなくまどひいにけん

操江號 倉田保之

うちむかふ力もをれてまら旗のまらしくも捕はれにけり

豊島大捷のかたに 鳥居惠子

おのれから碎けし浪もまづまりて朝日まばゆき高麗のうな原

豊島沖海戦の圖を見て 小林正和

うつし繪の上をてらせる朝日さへかちし軍の光あるらむ

牙山大捷 湖處子

はらくと風にみだるゝ秋の野の露よりもろしもろき支那人

成歡陸戦

長谷場致堂

虎はゆる高麗の荒野に馬たてゝいさみし聲にちる木の葉かな

成歡の勝軍を喜びて 大野 泉

日の旗のみいつの風になびきふす唐土人ぞ見るかげもなき

牙山の戦勝をよろこびて 桂 子

日の本の神のいぶきにから山の秋の木のはぞ散りはてにける

大島旅團長を 北田梅仙

大しまの岩ねにもろく碎かれてよるあた浪やたちさわぐらん

松崎大尉 齋藤惠治

わたりてし川のかげ橋たえてなき功を世々に流しつるかか

成歡の戦に吠吟卒某の銃丸にあたりながらも其樂調をと

いめざりきときよて 本多 晋

玉きはる命のきはみ軍ぶるのきらべみださぬますらをあはれ

依田美狭古

諸人をすゝましめむとおのが身のたふるゝ迄も吹すさびけむ

支那敗兵 會田安昌

尾をまきて逃しゐの子の果々は飢えなえてやさまよひぬらん

毎戦清兵先發 湖 處 子

弱さをば見せじといとむ心にぞ弱きこゝろのあらはれにける

宣戦の大詔ありける時 三橋 中雄

いにしへのあとを尋ねて武夫のありなれ川に水やかふらん

宣戦の大詔の時我室蘭護港私團の人々と共に鳳凰山にも

のして

もろ共に勝閑あげんいざ今日のからとり山をふみならしつゝ

天祐俠 鐵 幹

いなづまの光も見えてひとむらの横ぎる雲にかみなりわたる

いづちふく山風ならむ夕立のゆくへさだめぬくものひとむら

清艦灣外にいでずときよて 小林正知

こえ兼て浪にたゆたひ日をくらすからい今こそ末のまつやま
大勝利の後まばらくたゝかひの事も耳にせざれば

古川 穂 主

いざすゝめ神代もいまもわが國のつよきを見する時はこの時

桂 子

天つ日の光さしそふみはたこそ錦のくもとたあびきにけれ

畏くも我 今上陛下御出陣あらせられし日戦地より大勝

ありどの報に接して 赤心一徹樓主人

天皇の日の大みはた打たてゝすゝみゆくてにかちどきさきこゆ

大本營を廣島に開かせ給ひし日我軍の大勝利の報を聞て

小町谷 杉園

すめろぎのみいつかしこし日の御旗向ふ處にあたもなくして

天皇陛下在韓の日本軍隊に物を賜ひて勞をなぐさめらる

松本勝三郎

ゝよしうけたまはりて

大君のめぐみもふかきたまものに心いさまむやとまものゝふ

平壤敗兵

米澤與十郎

十六夜の月はあれども遁るべき道にまどへるえみしらあはれ

海陸の大勝軍をさゝて

加 茂 水 穂

陸に海にたゝかふ毎に勝軍きのふもけふもさくぞうれしき

我軍の勝利をさゝて

大 原 恒 齋

日のみ旗かゝやく空をいかにして老たる龍ののぼりはつべき

日のみ旗てらすひかりのはげしさに龍ひひそみぬ大和田の原

かくあらむ斯あるべしと兼てより定めながらも嬉しかりけり

思はずも文机たゝきこゑたかく君の八千代をことほぎにけり

朝 日 重 光

くはしほこちたるといひし我國の其名は今ぞ世に知られける

大 木 永 信

むかふ所あたあるべしや高光るわが日のもとの日のおは御旗

國のため命惜まぬますらをのいさをい今日ぞあらはれにける

英 雄 道

まごゝろにきたひくし劍にいかで向はむからのえみしら
秋風にちるこの葉にもたとへてむ向はで逃ぐるこど國のあた

笹 村 良 昌

浪あらし海にくぬがに大御旗むかふかたにのあたなかりけり

古 川 穂 主

國地をめぐれる海のはてもなくひかりかゞやく日の御旗かな

小 林 正 和

今よりや虎ふす野べもふみわけて醜の醜くさかりつくすらむ

雲 臺 生

古のますらたけをのいさをしをまのわたり見る時は來にけり

長堀政子 十四才

えきしまの日本武夫のいさをしは外國までもかゞやきにけり

我軍大勝利をさゝて

海軍の大勝利をさゝて

松 岡 隣

秋津島えき風つよく吹われてもろくもえづむもろこしのふね

村 上 正 弑

すめ國のみ軍ぶねのつゝさきに向はん船のあらじとぞおもふ

黄海の戦にみまがりし人の上を思ひやりて

富田しゆむ子

國のためいさを残してたつ浪の泡ときえけん人をしぞおもふ

野田陸軍監督長の廣島に出張せらるゝに

藤 島 正 健

國の爲おもさをにあふ身にしあれば朝な夕なに心せよ君

法學士高橋氏の軍艦某號に乗組を命せられて出たつに

穂 積 陳 重

とる筆のみじかさつかも劔太刀及ばぬいさをさみやつらむ

渡韓の命をうけし時 騎兵一等卒 東端 林平

君が代をれもふ心のひとすぢに我身ありとはれもはざりけり 高瀬 眞卿

朝鮮へ渡る兵士によみておくる 行けよ君むかしの人もから國にたてしいさをい有ける物を

友の召集に應ずるを送りて 本多 直

日々にとぐ君が心の太刀風に木の葉とちらむえみし醜男は

吾職を奉する中學校の生徒某の臨時に召集に應じて出で 石森 和男

たつ別に

さかばきに皮さかばきて歸れ君もろこしの山のむくつけき虎

弟の渡韓するを送るとて 嘉悦 博矩

もろこしの人にえめせよ國のためかねて磨ける日本だましひ

送征兵 甲 秀輔

往やゆけ進めやすめ國のため身は唐國のつちとなるとも

送人 山田 やすら

日の本の名をし思はゞ血ぬらさぬ太刀とりはきて歸るなよ君

某軍人の朝鮮にゆくを送る 早稲田 道人

君がためゆくべき道と思はずば今日のわかれも悲しからまし

海軍兵を送りて 石原 徳三郎

浪あらし八重の汐路をふみわたり遠のまもりと君のゆくらむ

女婿保雄の従軍の別に 富山 茂三郎

いざさらば皇國の爲につくせよやわれにひかれて心のこすな

もろこしの國の醜草茹りふせて其いさをしをいへづとにせよ

澤村唯八郎の従軍の別に 船田 某

君のため國の爲ぞとおもへばや今日の別のうれしかるらむ

そびらには矢をば立てじといにしへの教をふかく心してゆけ

軍人某に餞別すとて 作者 不詳

こゝろして馬に鞭うてありなれの川のさかひを越るあしたの

臨別 鷹峯 居士

忍び音になく妻よりもをさか子の別ると知らで笑むぞ悲しき

思遠征

加藤 安彦

限なき青海原をいくさぶねいのちもかるくのせてゆくらむ

梅村 宣雄

明ぬれば今日いかにと外國の軍のたよりいはぬ日なし

南摩 牧子

朝日かけのぼるほまれを海の外に輝すべきみいくさぞこれ

安東 菊子

勝どきの聲もろともに皇國のますらたけをの名も響くらむ

遠征の吾兵を思ふ

木口 釧矢

さらでだに旅寐となれば物憂きを思ひこそやれから國のそら

梅川 寛重

いづ方にますら健男ら旅ねしてこよひの月をいかに見るらむ

英 雄道

朝ごとにまづ思ふかなから國のわが兵士のいかにあはるらむ

稲垣 金吾

雨ふる日月清き夜いとしくわがつはものぞ思ひやらるゝ

征清の軍士を思ふ

第一高等學校歌學會席上作 菊地 駒次

うつ筒の煙のそらにみちくゝて曇りがちなる月や見るらん

大伴 來目雄

仇うつとつゝを枕にねてもなほわが大君のゆめや見るらん

斯波 孝四郎

から山の野分のころやいかならんけさの身にしむ秋のはつ風

藤林 道徳

こよひわれ月にむかひてものゝ草の枕をおもひやるかな

大瀧 潤家

どらほゆる野べふみわけて丈夫はいかに見るらん弓はりの月

平山 正

ほことりて虎ふす野べにたつ人は此月かげをいかに見るらん

石原 誠

てる月に鎧のそでやぬらすらむ虎とりひしぐますらたけをも

横瀬 二郎

立向ふかたきもがなといさみつゝ月につるぎをとり磨くらむ

乾 政彦

つゝ音のけぶりもたえて鴨緑のかはかせきよく月やみるらむ

黒川 耕作

敵まつと太刀ぬきつれてますらをが今夜の月にもり明すらん

池田 正彦

から國に草まくらする武夫も同じころに月や見るらん

服部 直樹

雨につけ風につけても思ふかきみ軍すゝむもろこしがはら

田中米太郎

虎はゆる國にむかひし人もあほふるさと忍ぶ夢や見るらむ

青木 武助

こよひ此光くまなき月かげをわがものゝふいかに見るらむ

千葉 胤明

對月懷遠征

からころもうつ人いかにいさむらむさはる雲あし秋の夜の月

竹澤 宗次

ますらをの月や見るらむあはは皆遁て跡なき城のやぐらに

村岡 典嗣

さやかなる今夜の月にむかひつゝ思ひいづらむふるさとの空

成田 保子

さやかなる月を見るにもこと國に戦ふ人をおもひこそやれ

月の夜遠征の友を思ひて 岩田 操

いくさある友いかにと見る月を友も見らん知らぬ荒野に

月夜在韓の友人を懐ひて 嘉悦博矩

韓山に銃をまくらにもものゝふがいかにこよひの月ながむらむ

月に對して西海の友を思ふ 千瀾万濤樓主人

さやかなる今宵の月をわたの原いづこのなだに君は見らむ

月の夜こたびの軍を思ひて 戸田則素

あし原にひかりあまりてから國の暗をも照らす秋の夜のつき

月の夜戦地にある人々を思ひやりて 桂子

から山をふみどゞろかす大丈夫も月にみ國の空やこふらん

古曆八月十五夜朝鮮のことを思ひやりて

片山尙彦

から國の今宵の月やいかならんわがうらやすの空いさやけし

甲午仲秋良夜所感十首の内 澤田重穎

いでましの大みかりやに此秋のこよひの月を見そなはすらん

虎がふすからの荒のに戈たて、月にいくさのうたうたふらん
駒なべてわがますらをい打きはひうらの都のつきや見るらむ
鱈躍る大うなばらにいくさぶねほづゝならべて月や見るらん
あまりにもすめばすむ夜の月のうし思へば思ふことの絶ねば
照る月に抜てかざして打ながめ只いたづらにもたん太刀かひ

在韓兵士の健康を祈りて 米澤與十郎

玉ちはふ神のまもりのいくさ人すこやかなれど猶祈るかな

朝鮮の空をながめて 赤坂兵士

ことさへぐ百濟の海は廣しとも夢にわたらぬ夜半はあらじな

韓國にある兵士の心を 日本撫子

ふるひおこしいざ戦はんつるぎにも大刀にもまさる大和魂
國のためすつるに何かをしからん君にさゝげし命とおもへば
なびかすは皆かりはらへ踏つくせもろこしの野に生るゑ草

軍中月 鈴木重嶺

夜をこめて戦ふときにかゝり火にかへてさやけき月や頼まん

加茂水穂

あた打ちし煙もはれてさやかなる月や見るらんもろこしの原

加藤安彦

あた浪をくだきくしてとる太刀のさやかにすめり秋の夜の月

三浦千春

みいくさの數にいりてもみつる哉とらふす野べの秋の夜の月

先光清風

見渡せばよせくる敵のかげもなし月こそすめれもろこしの原

佐々木古信

横たへしほこを枕に見る月のみにしむばかりさやけかりけり

江刺恒久

あす知らぬ命と思へば打むかふ月こそわれをあはれとは見め

梅村宣雄

たゞかひのちまたもよるの静にて雲井に月のかけぞふけたる

岩田操

死も生も君のまに〜行く道をさやかにてらす月のかけかな

甲秀輔

うつ筒のけぶりの末に月すみてもりかげちかく駒のいな〜

こゝの峰かしの岡に旗見えて月にいな〜こまのこゑ〜

鈴木寛之助

さやかある今霄の月ももろこしのくもりやすらん火矢の煙に

尾臺静子

駒なべてを〜しく進むみいくさのみ旗をてらす月のかけかな

閨怨

作者不詳

わが夫の衣ならずばいかにして夜寒の秋の月にうつべき

二人してめでつと見しの夢なれや閨の戸白きあり明の月

威海衛つきしみふねに君ありと聞きしは月の初かりけむ

西ふきて雁のたよりはさゝしかど戀しき人の音づれもなし
かゝる折昔の人もよもすがらこるもうちつゝもり明しけむ

心やり

作者 不詳

國の爲君のみためといさぎよくすてし身あれば何をしむべき
さらばとてゑみて別れし其さまを猶まのあたり見る心地して
父君はいつかは歸りきさまさむと問ふをさな兒に何とこたへむ
功をば人のほむるを聞くたびになみだの袖にせきあまりつゝ

朝鮮の擾亂をきゝて

相 嶋 美 隆

から山に風こそさわげこのゆふべ虎のふしども荒むとすらむ

征清の歌

さしいづる日の大み旗ほのめかばえみしは消む朝霜のごと

征清事件

本 多 晋

時ならぬ秋の霜をやてらすらむありなれ河のなつの夜のつき

時は來にけり

鶴 光 美

舟ゆする汐風つよみ日のみはたひるがへすべき時は來にけり
武士のさやにをさめしつるぎ太刀とり出すべき時は來にけり
日の本の國のひかりを世の中にかゝやかすべき時は來にけり
まごゝろを君にさゝげてくのため力をつくす時は來にけり
からたちの大木の蔭にぬる人のねぶりさまさん時は來にけり

日清の開戦を聞きて

鈴 木 吉 男

太刀とりて起てよわが友虎がふすから山あたり風さわぐなり

日清の戦争をきゝて

瀧 澤 京 作

日の本のますら猛男のからくにかよわき敵を物のかずかは

小町 谷 杉 園

日本の清きひかりにから國のまこのまこ草枯れか果つらむ

大 石 元 郷

いと弱き身の程知らて我國にむかふもをかしからのえみしら

大西義彦
から國の嶮しきみちも駒なべてす、みゆかなむ日本ますらを

送征夫 湖 處 子

わがせこが舟出おくりて沖つ波かへすくもものをこそ思へ

征戍

なす事もなくておきふし暮す日の戦ふよりもくるしかるらむ

皇軍の雄々しき事をたへて 北 田 梅 仙

よのみだれ打まづめんのつゝさきにもろこし舟も浮び兼けん

小 林 正 和

ますらをにかりたてられて虎すらも千里の遠ににげ迷ふらん

會 田 安 昌

さやぐらん草のかき葉の跡もかく刈りはらはまし唐土がはら

虎も出ばうちどりなましから人を易く屠れるますらをのとも

競雄名 一貫堂主人

いにしへのたけき男の子とから國にその名争ふ時のこのとき

鳴緑江 槐 園 主 人

ありなれの川浪たかし月さえてあらそふ龍のかげも見えつゝ

秋風 岩 田 操

太刀の音つゝのひゞきにまじりけりからの荒野の秋のはつ風

かちどき 巨 口 赤 目 子

打ば碎き攻むればとりて向ふところ敵こそなけれ海に陸がに

黄なる海唐くれなゐにそまりけむ打碎かれしあたのちしほに

いくさぶね數をつくして白旗をかへげしむべき時のきにけり

やけのこるからふねいまは何かせむ疾ゆきてうてべきの都を

日の御旗さしたてむ日は近きぬ支那のこさしが住る城のべに

從軍出願者の中に加りて 下 谷 老 人

この髪をそめてもゆかん老が身の残すくなき世のおもひ出に

われ去年後備の軍籍ををへて國民軍の内に入ぬれど猶い

つ召集の命あらむもはかり難ければ家の事どもをよくと
のへ古刀のすぐれたるをもとめて 松本伴次郎

あはれく此刀もて唐土のえみし斬らむいつにかあるらむ
身は軍籍にありながらいまだ召集の令もなきをかこちて

萍舟居士

まごゝろをこめにし劍ぬきもちてまこの醜草なぎはらひなん
大君の御旗のなびく高麗の野の手に立つ草木あらじぞ思ふ

偶作

城西隠士

銃とりてすゝめものゝふまつろはぬ支那の奴等うち盡すまで
太刀とりてむかへますらをくなたふれ支那の王を斬屠るまで

諏訪忠元

まこ草をかり拂ひつゝ日の御旗かゝげて歸るときをこそまで

増山増雪子

かちどきの聲ひひききて日の御旗ひかりまばゆくなびく神風

佐々木霜湖

かねてよりみ國の爲と鍛ひして日本がたなをいざためしむ

細田榮徳

むかふどころ切りてなびけて天つ日の御旗掲げんからの都に

大橋文之

偶成

軍ぶねうづまく波の音高く名をぞとゞめんやまどますらを
我も又やまどをのこぞ事しあらばとりもつ筆を捨て起つべし
われももど武夫の家事しあらば世々に傳ふる太刀佩てたゝむ

水島菜花

はびこれるまこの醜草をれふして高麗の荒野にくつわ虫なく

眞洞居主人

まきしまの大和かぬちが焼太刀のかど打はなつ時は來にけり
糟湯酒うちすゝろひて藤卷のたがみおしねり今日もくらしつ

偶感

久保木健雄

事しあらば振ひいでんとかねてより磨きし太刀は是ぞ此太刀

安藤弘

えびすらが屍は野べにさらされて虎やはむらんもろこしが原

竹の里人

焼太刀を手にとり見れば水無月の風ひやゝかに龍たちのぼる

虎嘯堂主人

二つなき身をもわすれて勇みゆく大和たけをの心ゆかしも

竹中生

虎のふす高麗もろこしの野末までふきかびかせよ日の大御旗

巴戟天人

思ふ事みちたらはしてから國もひとつにてらす月やまたまし

相澤朮

のる駒に水かひがてらますらをいありかれ川に月や見るらむ

金子雄太郎

この夜ころ太刀を枕にまどろめば仇うちえたる夢のみにして

斯花の家

氷なす太刀とりはきて見さぐれば夏の夜ながら月さむくして

風流史

こまくだら新羅もろこし打ふせて比麻良那の山に旗をたてばや

棚澤敬之助

日の御旗胡砂ふく風にひるがへし月にうそぶく大倭ますらを

よみ人あらず

なきふせて高麗野の秋の月を見んゆくてにたてるから黍の草

齋藤延正

事しあらば今日だに召させ大君にかねてさゝげし命なるはや

宮崎菊三郎

いざといはなき盡さなむ外國の百千の夷なにものかい

聞韓山風雲述懐

示人

筆とりて何をかいはいむ事いたゞこの太刀にありたゞ此太刀に

示友

步兵第三聯隊 某

みいくさの耻と知らずや徒にとる太刀ならばさもあらばあれ

齊我腎

萩の家主人

いざからこゐさらひくらへ日の本のますらたけをがこの腎を

馬伏櫪

失意生

千里ゆく心ばかりいはやれどもほだしはなれぬ駒の身にして

時事にふれて

小澤 幸民

大君の爲としならば虎がすむわら野の末もふみわけてまし

日の御旗高くさゝげてから國を打なびかせよますらをの友

折にふれて

品田 守信

から國のまらせまつ身の鈴虫のちく聲にさへおどろかれけり

堀内 文麿

ものゝふが國のみためとうつ筒に神の心もうごくなるらむ

跡見 花 蹊

いさましき風のたよりに此秋のあはれてふ事も覚えざりけり

秋風の身にしむごとじにから衣うち平らげんことをしぞれもふ

作者 不詳

戈とりていざや眺めむ西の方もろかしかけてすめる月をば

大屋 丙子

ものゝふのつるぎの霜に秋をらぬこまのはり原紅葉そむらん

静 子

日の本の太刀風はやみから國の人の木の葉のやまどこそなれ

吾 心 赤 女

唯にやの暑しといひて暮すべきみいくさ人のいたづき思へば

御軍にいでこそたゞね國のためつくさん道のなからましやの

感ずる所ありて

作者 不詳

矛とりていざ立ちあがれ御國人ぞこのまて草なぎはらひてむ
思ひ出るまゝを
不二山人
いづくまでてり渡るらむ久方のわが日の本のくにのひかりの

從軍行

湖 處 子

わかくさの妻子すてつと人のいふ身をすて、ゆく益荒武夫を

依田美狭古

大君の爲にいなどかをしむべき塵よりかるきわが身ひとつを

木村三太

敵のはやおちてゆくらしから山の木深きわたり駒のいなゝく

擬營中作

金子雄太郎

たきすてし篝のけぶりかつ消えて雪よりまろしけさのはつ霜

矢さけびの聲ときゝしの夢あれや月よりおろす山おろしの風

擬軍中作

一 葉 生

野を行けば朝霧きよしすたれたるわたのとりでに月なほ残る

塞上曲

金子雄太郎

かゝり火の煙は消えてくらき夜にいづこと知らず角の聲する

進軍

湖 處 子

日の丸の旗ひるがへせみくに人阿爾泰山のたかねおろしに

夜間演習

赤坂兵士

つゝ擔ふ手にかゝりけり夏の夜の月をやとし、松の下つゆ

斥候

水島菜花

矢玉ふるもろこし原に駒たて、仇やいかにど小手かざしつゝ

海軍水兵

村上正弼

わた中を真梶すゝめて國の爲つくすますらをを、しかりけり

報國

西陸の漁夫

二つなき身をも誰かのをしむべき國にむくゆるますら猛夫は

民心

泣 男

おくれじといそくぞ民の心なる大みくるまの御あとをたひて

日章旗

久保木健雄

ものゝふがかさず朝日の旗風になびかぬ國のあらじとぞ思ふ

泣 男

天てらす日の大み旗あふぎ見てなびかぬ里はあらじとぞ思ふ
天つ日のみよの旗手とかざしゆく道にのさはる雲もあらじな
奥ふかくきりて開きて導きて我はた立てんもろこしがはら

日本刀

戸田則素

ものゝふの太刀風さむしその太刀の霜ときゆらむわはれ夷等
支那まけ日本はかつといふ事を沓冠におきて

小林正和

まをの皆まほに風うけにげて猶むかはぬ舟のからく逃れつ

海陸の勝報をきいて

伊東都留子

海山にひゞきぞわたる進みゆく大御いくさの勝ときさの聲

思ふ心を

富田玄ゆん子

いとせめて神をぞ祈るみ軍にまたがひがたきたをやめの身の

海陸軍の勝利を

大塚楠緒子

わたの船打しつむれば陸に又かちときあぐる聲ぞきこゆる

分捕品を見て

太刀すてゝ走りしあをを笑ひつゝ幼子さへも打いさむなり

遠征の我兵を思ひやりて

藤島雪子

あたうつと進みゆくらむ益良雄の風あらし日も雨すさふ夜も

我軍平壤城を攻取ぬと聞て

小原正子

國のためつくす心のあつまりてかたき城をも攻めどりにけん

橘糸重子

かねてよりかくと思へど海も陸もかちぬと聞ぞ嬉しかりける

根岸るみ子

うち拂ひまた打沈めみいくさのみいつあまねし海にくぬがに

野戦病院の病兵を思ふ

朝山元子

國の爲おひしいたでに病ふせるますら猛男よいかにかある覽

兄の召集に應じて出たつ日

中村たづ子

家のことに心のこさですゝみませ我く_にのためわが君のため

兄の召集に應じて出たつ時

島田愛子

もろこしの虎ふす野べもふみわけてふるひまさなむ日本魂

病の床にありて遠征の我師を思ふ

佐々木光子

いくさ人高麗の荒野や進むらむふしどにあれど堪ぬあつさを

雨ふる夜遠征の吾兵を思ひやりて

窓をうつ雨のときゝておもふかな野邊にふすらむわが軍びと

我軍の捷報をきゝて

佐々木昌綱

から衣ころもへずしてうちどらむ秋風すさぶあたのみやこを

對月思遠征

健男ら_い今夜の月を眺むらむ山松の上にうづしほの上に

靖國神社々内の分捕品を見て

いかで我に向ふべしやハ斯ばかりふりし銃もて舊し太刀もて

征清の歌

佐々木信綱

國のためどぎしつるぎを國の爲ぬきてあたうつ時ハ來にけり

せめとりて日の大み旗つきたてむあたの都のまろのやぐらに

應募兵

つはもの_{おのこ}にめさるゝをのこ喜びていでたち行くかあはれ男ら

征清の我兵を思ふ

うちわたす駒のひづめにかゝるらむありなれ川の水のまら浪

百濟野にまげるまこくさみ軍の駒のひづめに枯れかはつらん

草ふかき高麗のあら野にながむらむくものたえまの有明の月

海陸の捷報をきゝて

神のまもる大御軍のゆくてにいたつ浪もなしふくかせもあし
かちどきは海にくぬがにきこゆなり浪にひびきて谷に響きて

喇叭卒白神某の戦死をきゝて

息のをの絶むとすれど笛の音を猶たゝざりしますすらをわはれ

擬従軍行

駒なべて高麗のあら野を朝ゆけばはたてあびかし秋の風ふく
むちうちてうながす駒の立がみに朝風さむし野路のまのはら

擬軍中作

ぬばたまの夜のふけぬらし銃とりてすゝむとりてに月傾きぬ

擬艦中作

たちまちの月のぼりぬわたの船沈めはてたる荒なみの上に

長 歌 部

陸軍大勝利の歌

田名部彦一

天雲のたなびくかざり
國のしもおほくあれども
茜さす日のいるくに
人ごゝるとゝのはざれど
人こそは多しといへれ
玉の緒のいのちのかざり
日の本のますらたけをか
玉かづらつるぎの光
打しきる火づゝの音に
かしてみてにげてかへる

あまつ日のてらすきはみに
人のしもさはに住めども
國からの代々にかはれば
國こそいひろしといへれ
ここにきしのいひのまに
たちむかふをのこなければ
いさましくつらねて進む
いちばやくたまをこめつゝ
目も見えず耳も聞えず
ならはしのつねなりけらし

かきはなす岩やこもりと
 守るかどふかくさぐるに
 川なみの深くめぐりて
 鳴神の音するものを
 軍びとわかちかはし
 玉ぼこの道ふみわけて
 川のせを勇み渡りて
 とこ岩もちりとくだけて
 松の葉に風いふきても
 あた人のおふかと思ふ
 村ぎもの心もあらじ
 入日さす國の都に
 ますらをの友

朝鮮近海にて我海軍大勝利の歌

いつのまにこゝろかためて
 山なみのたかくそびえて
 すゝみゆく路のそにし
 玄らぬまにうづめおければ
 奥山の岩ねこゝしき
 おちたぎつ音さへ深き
 うしろよりもせめ戦かへば
 くも子なすちりてうせぬれ
 水鳥のさく音さへても
 醜男らが又も來たらん
 玄かれどもこゝろゆるべす
 いかり猪のはやくすゝめや

言さへぐこまのくにべも
 大君のみ言のまにま
 霧のたつ浦のことく
 くまもなくいゆきめぐりて
 朝なぎにまづ風ふきて
 磯べに木綿おひをり
 和田の原うち眺むれど
 沖べにいかもめうきある
 玉だすきかけて思へど
 ぬさまつり神にいのれど
 山おろしすさぶがどとく
 八百よろづ千萬神の
 日の本のわが軍ふね
 ふちをさい進みはかり

諸越のとほきさかひも
 軍船けぶりはきつゝ
 雲のゐる島のさきく
 陸路をし打ながむれど
 夕なみにさゝなみよせて
 なぎさに玉藻のなびく
 邊つべにあぢむらさわざ
 さゝかみのよりてなびけど
 静風のやはひなびけど
 五百重波よするがどとく
 から船のいそみてくるを
 神づまりうしはきいます
 こぎためてたちて向へば
 玄らゆふの旗れしたてゝ

玉藻なすなびけるものを
 たく柴の火筒のたまを
 舟やぶれかぢのくだけで
 鴨じもの浮き沈みつゝ
 水の泡のきえゆくがごと
 船をとりつならちかけて
 うな原に朝日の旗のみ
 浪のむたいやまぐくくに
 ますかゝみひろく渡れり
 遠きよにいひつぎゆかめ
 たけきさいさをい

清國を征する我軍人の勝利を祈る歌一首並短歌

佐藤 恭順

言さへぐ清國王

日本の倭に對ひ

たはれ男がいたくこばむに
 鳴神のとゞろに打てば
 あぢむらのさわぎのしり
 あま少女かづくがごとく
 きねもゆきかづきもゆけば
 歸るさにひきてかへれり
 風のむたきびきかゝやき
 大君のみいつのひかり
 玄かれこそかたり草ども
 ますらをのをたけふりたる

結びてし條約に戻り
 軍艦韓海に浮けて
 無禮も大砲放ち
 韓國を奪ふ術か
 無道穢き所業ぞ
 天の下八洲の國に
 其故にいともかしこき
 韓國のどほき境に
 皇軍の將校等
 荒駒に鞭ふり立て
 千萬のますらたけをに
 吹風にみ旗なびかし
 木の根ふみ磐根もさくみ
 海原の沖に渚に

交際し信義に違ひ
 吾國の軍艦に
 いかあれば斯もありけむ
 吾國をはかる心か
 然れこそ吾天皇の
 交戦を宣らし給ひぬ
 大詔いたゞきまつり
 艦乗しまかりましけむ
 劔太刀腰に取帶
 軍事とりすべ給ひ
 小銃もち大砲ひかせ
 ふく笛に列を整へ
 暴き風あら浪さけす
 陸兵山澤野邊に

時どなくけぶりふきたて
 音しげく響きわたらひ
 うち防きいそみたゞかひ
 岩垣の八重あす楯も
 百万敵のよするも
 速けく北京攻とり
 擒にし國內ことごとく
 日本國のみ稜威を
 宇内に光り渡らし
 大海に艦の舳續け
 雲井ふく順風に靡け
 すゝみどく歸り來まして
 ことほがひ奉らむことを
 天つ御神地つ御神

打放つ小銃大砲
 天地もどゞろくまで
 眞鐵まき造れる艦も
 打碎きくだきちりにし
 斬屠り攘ひ打退け
 清國の國王
 掃き清め服従しめて
 さしのぼる朝日の如く
 事終りかへらむ時の
 皇軍の朝日章の御旗
 軍歌たかくうたはし
 かへりごと奏し奉り
 皇祖皇大神に
 八百萬ちよろづ神に

朝なく神酒御饌供へ
 かしこけれども

反歌

大みこといたゞきもてる軍人ささく守り給へあめつちの神
 清國をはや言向けて軍人かへるまちなん御酒かもしつゝ

九月十四日の作

坂 正 臣

あめのごとあられのごと
 とびちがふ玉のまををも
 打あぐるときのことゑに
 高山のいはほもくえおち
 膽くだけ魂消えて
 鋒とれどつかむともせず
 遁るには豈まかめやと
 病みじゝのみちも撰ばで

みだれちるはのはの中
 はゞからす進むみ軍が
 大川のなりもなりほえ
 妹がつむ茶にす夷の
 つゝもてと射んどもせず
 はかりごとあまたありとも
 ゆく鳥のささをあらそひ
 巳が國へまどひまぞきて

幣捧げ祈り奉らむ

皇軍は平壤のうちへ
み心をひろ島さして
勝どきのひびきをばやく

今日もかも入りやたつらん
いでませるわが大きみに
奏えあげなん

反歌

天地もゆるるばかりのからどきを一日も早く聞んとぞ思ふ

賣炭賊

金子元臣

毛物はもさかはぎにはげ
千早ふる人の身にして
獸おすおこなひあらば
入ざさにさくともたらじと
まきしまのやまどの國の
飛ぶ鳥の争そふはしに
民草は賣も何かと
うつたへに心つくすを

鳥はもやつぎさにさけ
鳥なす心をもたり
逆剝にはぐともあかず
人もまか我も思へるに
諸越のえみしが伴と
武士の命もいかで
もころをに力を合せ
その寶さゝげぬのみか

其命死なぬのみか
軍船やるべき炭を
世の中のまこのまこをら
なほくくに炭やうるらむ

千万のこがねまほりて
夷らが手にぞ渡せる
是をしもいけてをあらば
國やうるらむ

豊島と牙山海陸の戦に勝ちたるをよめる

今泉訓太郎

かけまくもあやにかしこき
さこしをす秋津島はしも
事さへぐ人の國をも
神思ひおもほしめして
うれたみと嘆くも救ひ
倭けたる支那てふくにの
かにかくに免し置しを
たわもぎを千々に計らひ

現神わが大君の
波風のさわぎなければ
安らげく治めまさんと
そこばくの軍をやりて
門のどを見さげ守ると
おほけなくなめしかりしを
韓國を我屬國と
思はさぬ豊島の沖に

我舟にはむかひ來つれ
 皇神も守たふとし
 いかでかひまをひやせし
 むれ別れかよりかくより
 ひたくだきくだき破りて
 おびえたる舟をいけどり
 打つる、火筒の煙
 陸ちにの喇叭の音の
 もろ人のをの、くまでに
 雷のと、ろく如く
 大山の崩る、如く
 せめよする大砲小砲
 あたの皆逃げちりにけり
 もみぢ葉の飛ちる如く

八百萬千萬神の
 天皇のみいつかしてし
 乗のむたかゆきかくゆき
 敵舟のむかふ軍を
 ありそ海藻くづとあしつ
 にぐる舟追ひ拂ふ迄
 黒雲のおりゐる如く
 あたみたる虎か吼ゆると
 打はちつ火玉の響き
 うちあげて追たつる聲
 もころをに負てのあらじと
 打かへす心も消えて
 山風の吹のまがひに
 玉きはる命いさんと

劔太刀身に添ふものも
 のこしれきつ捨て逃けり
 天地にひゞきわたれり
 我みいつ光りわたれり
 よしゑやし寒くは有ども
 大みこと頂きもちて
 武士のちかひし事の
 山行かば草むす屍
 花のむたかをりみたせや
 玉がきのうちつ御國の

征清の歌

玉鉾の道もせきまで
 いや高にあぐる勝どき
 西の洋の外國までも
 よしゑやし暑くは有ども
 現神わが大君の
 猶遠くいゆき向ひて
 海行かば水つく屍
 敷しまの大和心の
 花のむだ匂ひみたせや
 ますらをの友

日本撫子

もろこしのもろき軍びと
 皇國のたけきますらを
 一すぢにいさみす、まば

いく萬むれつとふども
 を心をふるひおこして
 まもりかねまつるひぬべく

さゝへかね従ひぬべし
かくのごとまつるはせをば
いかばかりたのしからまし
いざ共にとくうちひしぎ
君がよるづ代

かくのごとまつるはせをば
いかばかり心よからん
もろこしのもろき軍人
日のみ旗たてゝうたはん

旋頭歌

從軍出願人のことを

小林正和

もろこしの原のまこ草かりはらふとて

むら肝のこゝろとがまやふり起しけむ

雜體部

征清軍歌

虎伏す韓山踏ならし

小中村義象

進みに進む我兵士

見よや牙山の敵營の
大波さかまく海こえて
見よや豊島の敵艦の
海陸ともにいさぎよく
平壤の山大同の水
黄海の波威海の潮
日章國旗のさす處
鴨綠川に秋たけて
すゝめすゝめ我兵士
この川一つわたしなば
敵の死守せる奉天府
折しも海風ふき送る
旅順口のたゝかひか
ゆけやらゆけやら兵士

見るまに潰えて跡もなく
進みに進む我艦隊
底のもくづとなり果てつ』
向ふは支那の四百洲
よしその山は嶮しども
よしその波は荒しども
いかで靡かぬ國かある』
征衣ふく風膚寒し
進めすゝめ我乗る駒
この山一つこえゆかば
瞬く間にとりつべし』
大筒小づゝの其音の
勃海灣のあらそひか
ゆけやらゆけやら兵士

八重の雲霧かきわけて
天地のあらむ其かぎり
わが大君の大御稜威
青雲たなびく其限り
我 日本 の 御 光 を

進め吾駒

進めわがこまどくすゝめ
大和心のをどゝろを
天地とゞろくつゝの音
死ねやますらをいざ死ねや
朝日にきらめく聯隊旗
四百餘州の草も木も

往け往け日本男子

往け往け日本男子

共に眺めむ北京の月
日月てらさむその極み
かゝやかすべき時は來ぬ
白雲おりふすその極み
輝やかすべき世となりぬ

三千年來やしきへる
ふりおこすべき時なきぬ
み空にかゝやく劔の光
國に報ゆる時は來ぬ
君がみいつの追風に
靡かぬものゝなかるべし

外山正一

千歳の一遇ぞ

開闢の昔より
試すの今の時
神の敵人の敵
起て丈夫往け丈夫

武勇をえめせ

鍛へたる 我の腕
失ふなる 此機會
打殺せこの腕で
往け往け天下に周く

知らざるか我敵の
大國とこれ誇り
野蠻をばこれ極め
不義の賊詐偽の賊
起て丈夫往け丈夫

武勇をえめせ

大惡の 人非人
小國をこれ侵す
非道をばこれ盡す
亡ぼせや亡ぼせや
往け往け天下に周く

惡むべし我敵の
罪なきを虐殺し
汝にの母なき歎

惡虐は比類なし
婦女子をば辱かしむ
汝にの妻なき歎

泣く姉妹なく子あり
起て丈夫往け丈夫

其聲をきかざる歟
往け往け天下に周く

敵軍の兵卒は

強盗か豺狼か

彼は我母の敵

彼は我妻の敵

我姉妹女子の敵

神國の清き血を

敵軍の畜生に

穢さすることなかれ

起て丈夫往け丈夫

往け往け天下に周く

武勇をえめせ

うちころせ大砲で

文明の大敵を

衝き崩せ劔をもて

蠻族の巢窟を

東洋の文明を

進むるは我が力

撃てく突けく

君のため國のため

起て丈夫往け丈夫

往け往け天下に周く

武勇をえめせ

我海軍

旭にかゝやく日の丸の旗
千島の果より沖繩までも
一度も今迄けがされざりし
よせ來る敵艦幾百あるも
亞細亞に又なきこの島國に
幼き時より海にいで、
我をば攻んとする者あらば
よせ來る敵艦いく百あるも
風ふき浪たつあらしの時も
命を惜まぬ日本男兒
浪をば枕に死ぬるも覺悟
よせくる敵艦幾百あるも

ひらめくみ國の軍艦ともよ
開闢このかた異國の敵に
貴き海岸まもれや守れ
千尋の底へと沈めてえまへ』
天の恵でうまれしものい
嵐も恐れず浪にも怖ぢず
武勇をくらべん怒濤の中に
千尋の底へと沈めてみせん』
妻子の爲には沖へといで、
何ぞや恐れん敵の軍艦
君あり國あり又墳墓あり
千尋の底へと沈めて見せん』

弱き船にて大海わたり
鬼神なるぞとよばれし者の
彼より受けたる武勇を以て
よせくる敵艦いく百あるも
水雷 大砲 甲鐵 艦を
皇國にあたなす敵もあらば
一々汝の力でこらし
よせくる敵艦いく百あるも

皇國の旗

百千のいかづち空に轟き
龍は雲に躍りて稻妻はどばしり
天柱みるくく碎け地軸忽ち拆け
高陸沈みて操江は降る
皇國の旗の日の光

異國の海岸あらして廻り
大膽不敵の汝の祖先
天晴守れやわが神國を
千尋の底へと沈めて見せん』
自由に扱ふ非凡の手鍊
萬里を隔つる國なりとても
國旗の威嚴を天下に示せ
千尋の底へと沈めてまへ』

中 村 秋 香

うづまく煙は海を覆ふ
虎は風に吠て激浪さかまく
濟遠逃れ 廣乙やぶれ
あな心地よや勇ましや
まづこそ耀け豊島の海』

大砲 小砲 関の聲
屍は積みて山をさし
一壘落ち二壘破れ三四五六皆支へず
飛鵝流電追ひうつ味方
皇國の旗の日のひかり
波えづかなる瑞穂の國
今こそそのぼれ朝日かけ
錦の御旗や導くらむ
大御船をか負ひまつる
黄海万里えまける波風
四百余州風おだかやに
靡くや旗の日の光

峯を動かし谷を揺り
血いたゞよひて川を漲らす
風聲 鶴唳逃ちげる敵
あな心地よや勇ましや
またも耀く成歡の山』
あきつゑま山うらくと
空にいかける八咫鳥
海にいをとる大小魚
東洋半球あまぎる雲霧
是より晴れ今日より和ぎて
野末山永くわしなべて
耀く景色を明日こそは見め』

朝鮮行

世 外 佳 人

『つなみある、なり日本海
 かせさわぐなり朝鮮灣
 きたひくしつるぎ太刀
 かくいひつゝも打ゑみて
 『雲得し龍のわがつまが
 かしこき君のみえらびに
 行けよ行きませあはれ夫
 日どろかためしそのみ魂
 いざえめしませ勇ましく
 そもこのたびのわが敵の
 亞細亞にひろき清のくに
 世をわが物とうちほこる
 日本をの子がをたけびて
 海をもかへし山も裂く

日出づる國のものゝふが
 身の血ふらさん時の來ぬ』

みおほせうけし嬉しさよ
 から國わたるみおほせを
 外國かけてはれぐと
 こゝろひかせあはれ夫
 おほき人かすたのみにて
 にくさもにくき清のくに
 太刀のきれ味かれ知らじ

いでやつもれる國のはぢ
 國のまもりのものゝふと
 つかさうけますわが夫よ
 あまねき君のみめぐみに
 たま數つきむそのがさり
 太刀のくだけむそれ迄の
 敵のことゝ斬りなびけ
 風たち雲とぶから國に
 いでややまとの武夫が
 屍骸のつゝにさかるとも
 をみなながらもわが夫の
 みをしへうけし我身あり
 事もしやぶるゝ時あらば
 門出おくりておのが身の

解かむ晴さむこのいくさ

むくいむ時のきたりけり
 親しきたみのやしなひに
 かばねの山に血の川に
 こゝろふりたて進みてよ
 名譽を千代につたへてよ
 鬪體の馬にけらるとも
 御こゝろ安かれわが家に
 伏してまもらむみ劍に

たゞに我家をまもれども
對馬のあなた四十八里

豊島沖

めかり志ほくむ賤がやに
聲もいつしかたえゆきて
そよふく風にやゝはれつ
みどり色こき大ぞらに
ゆみはり月の入りはてゝ
てらすみかげにつるぎ太刀
三千年のむかしより
やまとごゝろのゑるしなる
青海原にあらはれぬ
ときいふみ月下つかた
我三艘の艦纜は

魂のわが夫ともろどもに
釜山のはとりはやゆかむ』

鈴木重信

あしたを告るくだかけの
きりたちこめし海原も
浪ぢ靜に夜いわけぬ
光も白くのこりたる
豊さかのぼる朝日子の
島もさやかに見えそめぬ
磨ききたひて類なき
くいの光の日のみ旗
のぼる朝日にかゝやきて』
五日ときこゆる朝ぼらけ
仁川さしてはしりゆく

をりしもゆきあふ黄龍旗
こなたの禮をあたにして
放つおづゝにいかでかい
こゝを先途とたゝかひぬ
けぶりの深くたちわたり
天つ日かげも色うせぬ
尙もかゝやく日の丸の
向ふものこそおろかなれ
もとより力よわければ
いづくまでもと吉野艦
きたなし返せといはねども
北洋水師に屬すてふ
いとむがまゝに秋津洲
おどらじものどたゝかへり

たかく掲げし軍艦の
戦ふそなへはじめけり
ためらひをらんためらむ
天地にとゞろく大砲の
まのあたりさへ見えわかで
あやめもわかぬ海ばらに
みはたのもとのますらをに
斧にはむかふ螳螂の
さゝへがたくてはせゆくを
逃しいせじと追ひゆきぬ
またも來れる敵のふね
操江號いちかづきて
かねてこしたる事なれば
かたみに放つつゝの音

乾坤爲にくつがへり
 おつるかごとくものすこし
 みなぎり渡り暗けれど
 敵のふねにぞ見えにける
 浪速のしめす信號に
 たゞ命これにしたがひて
 ゆさかふ使もあだなれや
 前檣頭にかゝげたり
 浪たちさわぎ船やれぬ
 深さうらみやのこるらん
 たちまちかはる水の色
 うかべる骸のみちくして
 思へばあはれふるさどに
 敵の城ともたのみつる

空にはためくいかづちの
 青海原は黒けぶり
 くだるまゐるしの白はたの
 つはものせし高陸は
 いかりおろして止まりぬ
 わがみ船よりあまたび
 最後をしめす赤旗を
 轟然とゞろく砲聲に
 藻屑となりぬ高麗の海
 深されもひやのこしけむ
 くれなるなせる海原に
 渡りゆかるゝごとく也』
 妻もまつらん子もまたむ
 濟遠廣乙うちやぶり

或いとらへうちしづめ
 戦術こゝにあらはして
 かちどきあげて諸共に
 南陽灣頭敵のふね
 はしらにたつる日のみ旗

軍艦操江

龍のはたあげしその間は
 黄なる旗あげしその間は
 黄なる旗朝風に打靡かせて
 高麗のうみ支那の海べを
 若干の支那のつはもの
 いかり綱あしたにまきて
 そのはたの風になびくを
 高麗のうみ豊島のあたり

廿とせあまりみがきつる
 たてしいさはは流れじな
 君が代うたひ歌ひつゝ
 ひきつれかへる三艘の
 風になびくもいさましや』

千瀾万濤樓主人

あれこそは支那の軍艦
 なれこそは支那の軍艦
 龍の旗夕風に打なびかせて
 行かひしこともありけむ』
 載せてゆく船をおくると
 みなどべを出にしどきは
 いさましと人も見つらむ』
 日の御旗たかくかゝげて

その下にまらはたかゝげ
いかり綱あしたにまきて
あはれく心なき汝は軍艦
一うちのいくさもせず
哀わはれ心弱き支那の軍兵
一うちのいくさもせず
日の御旗かゝぐるうへは
光のはたかゝぐるうへは
日の御旗朝風に打靡かせて
高麗のうみ支那の海べを
敵の艦よせもきたらは
まらあみの立むかひつゝ
日の本のますらたけを
かねてよりさゝぐる命

ちからなく降りしとき
港いでしいきはひいづこ
軍艦と名をば負ひつゝ
まら旗をなにかかゝげむ
つはものと名をば負ひつゝ
いのちをば何をしみけむ
なれもまた日本軍艦
なれもまた日本軍艦
光の旗夕風に打なびかせて
いさましくゆきかひ渡れ
その艦の巨多ありども
くたかすは碎けてまづめ
君のためみくにのため
そのいのちなれも惜むな

大御艦うちつらありて
日の御旗たかくかゝげて
大みふねうちつらなりて
日の御旗たかくかゝげて

喇叭の響

渡るにやすき安城の
敵のうち出す弾丸に
湧立ちかへるくれなるの
先鋒たりしわが軍の
この時ひとりの喇叭手の
進め進めとふきまきさる
その音たちまち打たえて
打たえたりしは何ゆゑぞ
うちたえたりしその時の

旅順口明日のやぶらむ
そのさきがけを汝いせよ
渤海に明日こそ入らめ
その道まるとなれいせよ

菊 間 義 清

名いいたづらの物なれや
波いかりて水さわぎ
血汐のはかにみちもなく
苦戦のはどぞ知られける
とりはく太刀の束の間も
進軍喇叭のすさまじさ
ふたゝびかすかに聞えたり
かすかになりし何故ぞ
弾丸のんぞをつらぬけり

かすかになりしその時は
 弾丸のんぞをつらぬけど
 喇叭はなたずにぎりつめ
 玉とその身はくだけでも
 なほ敵軍をやぶるらむ
 雲山万里かけへだつ
 君が喇叭のひびきにぞ

喇叭卒

與謝野 寛

進め 進め

君の恩 國の恩

報ゆる時の來りけり

進め 進め

吾吹く喇叭のこの聲に

こめて三軍の兵氣あり』

安城 渡頭 月暗く

すはや伏こそ起りたれ

敵の何者小ざかしや

打出す銃のすさまじさ』

進め 進め

君の恩 國の恩

報ゆる時の來りけり

進め 進め

吾吹く喇叭のこの聲に

こめて三軍の兵氣あり』

進め 進め

忠義にかためし此胸を

大男兒あゝ名譽

進め 進め

右手の銃を杖にして

敵の飛丸に撃たせたり』

進め 進め

見よや滴るこの血汐

倒れて己むべき我ならず

進め 進め

何惜しからむ今更に

片膝立てつゝるざり行く』

進め 進め

なほも呼吸のつゞくまで

日本男兒の心の色ぞ

進め 進め

死なば護國の鬼よ

異國の草木も赤く染み』

進め 進め

我の唯吹くこの喇叭』

かねて捧げしこの命

進め 進め

國のためまた君のため』

死なば護國の鬼よ

進め 進め

我の唯吹くこの喇叭』

さびづるや唐のえびすの
 高麗の野に打はびこるを
 こゝおほみこと
 かしこみて捧げもちつゝ
 よむ小手に涙こぼれぬ
 にくしやえびす』
 この涙おちてつもらば
 この聲のたちもひゝかば
 ちみもさわがむ』
 いざどもにふるひ立つゝ
 すべらぎの神のみこと
 うみにはた山に』
 うなばらの風にさほひて
 も、千船ふねのことく

八重むぐら道さまたげて
 きり靡けきりてすてむの
 くりかへし七たびやたび
 おもほえず聲さへたてぬ
 ありちれの川もあふれむ
 支那の海ちひろのそこの
 えびすらを攻まつるひて
 みこゝろに答へんすべは
 ちら浪のよせていくだき
 あら海のそこにちづめて

ままやつくらむ』
 つるぎ太刀立むかひつゝ
 千よろづの敵のことく
 まがらみにせむ』

中和の朝嵐

中和のむらに日陨落て
 敵いづこともとむれど
 林の中にこまたてゝ
 まばしまとるむ木下蔭
 その夜もふけて月五更
 ひたどやみけり稲のはに
 忽きこゆるとききの聲
 敵か味方かわかぬまに
 すはこそ敵の夜うちかれ

一柳安次郎

高麗の山こえくるえびす
 うちとめてありなれ川の
 かたわれ月のかげ凄く
 馬のひづめの音もなし
 ほこを枕に武夫の
 ゆめは何處を辿るらん』
 露にすだける虫の音の
 そよぐ秋風ものさびし』
 耳をつんざくつゝのおど
 けぶりのみちぬ野に山に』
 哨兵線をなやぶられそ

進みてやみくうたるゝな
つゝ音又もひききけり
敵のまぢかくよせくらし
わが兵はつかに七八騎
やまとをのこのとごゝろの
うちはるぼさんは易けれど
敵をさぐりしその上の
思はひとつしづくと
ゆくてにまたも敵數騎
進むも退もあたなれや
命のかるし任重し
筒の音まげくひくも也
いなゝく馬の聲たかく
夜のはやあけて月の高し

この身の君にさげしぞ
かなたの山のいたゞきに
林のかげに聲もして
敵は百にもあまるなり
かゝる時にぞまめすべき
われらは斥候騎兵あり
かへらであらじ本隊に
戦ひつゝもまぞくなる
つるきのふすま立にけり
右もひだりもつゝのれど
いざや破らんこのかこみ
劔のひかりひらめけり
ながるゝちしほの川のごと
眺め見渡す大野はら

血まはまたゝる處々
大和男兒のいかにせし
いまし見とめぬ敵陣の
あはれ中和の野あらしに
吹かれて破くる露の花

平壤の大捷

大同江はひろければ
忠勇無双のわが軍の
險阻をたのみし敵兵の
すめら御國の兵士は
ころしもあきの十六夜の
砲煙彈雨すさまなく
多勢をたのみし敵兵も
まばしさゝふる其間さへ

ふきゆく風のなまぐさや
旅ゆく人にことゝへば
軍門にさらす屍四つ
ふかれて露とちりにけり
これぞ男兒のこゝろなる

横井忠直

劔鶴山のたかけれど
苦もなくこえて進みけり
いかにか膽をひやしけむ
つばさありとや思ひけむ
月にひらめく日本刀
平壤城をとりかこむ
紀律あければ整はず
嵐に木の葉とちり失せぬ

げにことわりや今もなほ
ひかりまばゆき日の旗の
このいさほひに乗じなば
渤海灣のふかくも

軍中月

平壤府 大同江
見れば皆幾日もたぬ新戰場
清兵三萬はしらせて
よしやこよひの勝利の祝
旗の手に秋風高く吹渡り
をりく清くさこゆるの
故郷の三笠の山は見えねども
あはれ世は泰平廿年打つさ
やどさむ月とおもひしを

仁義のいくさに敵はなく
もろこしかけて輝やけり
凱歌のちかきうちならん
北京の城のとほくとも

鐵 幹

野のひろしながれば長し
すさまじき軍一揉程もなく
秋のなかばとなりけり
かねて三五の月の宴
幕の上に夕露白く置渡す
誰がたまづさの雁ならむ
天の原名に負ふ月の影あかし
おほみや人のそでのみ
槊執て眺むる今宵も有けりな

おもしろき今宵のいはひ
我營の將士十萬いざもろ共
ふるさと人がはるくと
うまさいたみの酒もあり
血に染む鬪體五千級

將軍不誇

大勝利 大勝利
み侍とく燭をたてまつれ
御代なが月の十五日
敵を重圍のうちにして
その日もくれてその夜の
平壤の城のおとしけり
敵の二万ときこえしが
われの火力にうちはたし

おもしろきこよひの月見
飲めや謠へやこのひと夜
まごころこめて贈りたる
着には今度の戦に斬たりし

快電夜いたる大本營
我君をたしく見そなはす
我軍四方よりおしよせつ
烈しきいくさうちつつけ
いさよひの月おつるころ
たましく遁れしその外の
或のきづけとらへたり

敵の兵器と兵糧の
砲軍の大將左寶貴も
大勝利 大勝利
この名譽なるたゞかひの
中將もとより徳たかく
この勝利をばつたへたる
『勇武なる天皇陛下の御稜威なく
臣の微力いかでか奏せむこの大勝利』
わが手に落しも數えらず
捕虜となせるなかにあり』
千古いまだきかぬ大勝利
將軍の誰そ野津中將』
いさゝか誇れるさまもなし
飛電のすゑにかけるやう
忠義なる將校士卒のあるなくば

黃海の大捷

横井忠直

わが海軍はいちはやく
またも浪路をけやぶりて
かの北洋の艦隊の
我が聯合の艦隊の
秋もなかばをすぐるころ
豊島沖にたゞかひつ
衝さしついで威海衛
名のみ残してかげもなく
うな原ひろく占めにけり
海洋島のほとりにて

はしなくおこる艦戦
あるひの碎きまたは焼き
そのいさをしは黃海の
あはれきのふは平壤の
艦のかずぐらうちしづめ
神のたすくる皇師に
直隸海峽のりこえて
逐ひつ逐はれつかの艦を
その藻屑となしはてぬ
なみおと高くひくくなり
敵うちはらひ今日はまた
陸海ならびすゝみゆく
いづれの敵かむかふべき
すゝめやすゝめ順天府

捷報來

千瀾万濤樓主人

捷報來れり捷報來れり
平壤の軍に勝ちし陸軍の
またれくし海軍の
波うちこえてきたりけり
敵やいづことまらなみの
大孤山名に負ふ沖の其邊
わが海軍の大捷報
その捷報をきしより
大捷報は西海の
わが艦隊の遊撃軍
立いで、遠く見わたせば
三つ四つふたつ敵の艦

浮ぶも見ゆるうすけぶり
 わが艦よりの信號に
 艦隊そろひて十四隻
 敵をまつ島橋立の
 鎮遠もありそのうちに
 旅順口窺きて見しも其爲ぞ
 いざいざさこゝろみて
 力見すべしいざきたれ
 たがひにむかふ海原に
 大海戦のはじまりぬ
 さかまく大浪海を震はす
 まづめし敵艦はや四隻
 焼けたる艦も二隻あり
 列をみだしてちりぐに

さきにすゝみし偵察の
 敵いいでたり北洋の
 いつかかゝと巖島
 まちにまちたる定遠も
 威海衛衝きしも汝を誘ひ爲
 よくこそ來つれこの沖に
 わが海軍のたぐひなき
 おきつしら浪おとたてゝ
 はや砲聲のとゞろきて
 轟ろく砲聲天をつんざき
 すさまじき軍ほどなく
 打たれて火をや出しけむ
 はての戦ふけしきなく
 さしゆくかたの威海衛

またものがる龍のかけ
 白浪に映る入日の影赤く
 いろいさましき大御旗
 かくてきたりぬ西海の
 千門 万戸軒ごとに
 いはふもうれし大勝利
 天皇陛下 万々 歳
 大孤山沖の海戦
 けぶりを立てゝゆく艦も
 たゝみのごとく歩みつゝ
 時しもひるの中そらに
 きらめくかのをちかたを
 雲かどふたゝひ彼の方を
 両眼鏡を手に取りて

黄海のゆふべ風さえて
 勝をいはふか帆ばしらに
 わが海軍の捷報は
 浪うちこえてはるくど
 日のおほみ旗かゝげつゝ
 日本海軍 万々 歳
 作者 不詳
 今日海面上おだやかに
 甲板にものがる
 太陽かゝやき照渡り
 すぐると見しは浮雲か
 見やれば怪しいぶかしや
 はるかあなたを打見れば

かれにも煙を吹立て、
 軍艦なるぞ軍艦ぞ
 かしこの山のかげなるか
 どくあふことを樂みし
 先にたちしは定遠か
 こあたも砲門うちひらき
 すでにああたに發砲の
 おくれのせじと色めきて
 艦すゝめよと命じける
 退くてふのえぞ知らぬ
 陸にてあらば駒の上
 當りてくだけんものゝふの
 艦と艦とのへだゝりも
 砲丸左右にふりそゝぐ

來たるのまさしに敵の艦
 浪の浮ねのゆめのまも
 こなたの陸のいり江かど
 軍艦なるぞいざやそれ』
 つゞくの鎮遠靖遠か
 旗艦のはたに氣をつけよ
 音はげしくぞなりにける
 信號まつや松島の
 艦すゝめよと命じける』
 大和ますらを時來ぬと
 海ぢはかくて玉よそひ
 奮ひおこりてたち向ふ
 次第に近くなりぬれば
 楯はこの胸この体ぞ』

今や三千メートルの
 うてよ大砲機械砲
 皇天けぶりにうづもれて
 ひゞきあひたる吶喊の
 其たゞかひの中のせを
 軍令部長こゑたかく
 きたなき振舞なすあかれ
 それも物かひすゝめよと
 聯合艦隊これを見て
 かれは假なる運送艦
 おくれをとらば耻多く
 禦けよ進めようてよやよ
 パツとたつたる煙の中
 たしかに致遠は沈めしぞ

近きにすゝみぬいざや打て
 砲撃最中になりける
 浪にとゞろく砲聲に
 こゑに天地もくつがへる
 立ちめぐるは西京丸』
 われこゝにありつはものよ
 大雷一時に落ちかゝる
 煙をついて進撃す
 あはれかの艦うたせまじ
 われは名高き軍艦ぞ』
 うたれ沈まば悔おほし
 うちまきりたる砲丸に
 ほのぼの見ゆるは何の艦
 たしかに來遠は沈めしぞ

經遠平遠燒きぬるぞ
 あはれ危し西京丸
 秋の木ノ葉とちりうせん
 發射再びなすといへど
 きたひし心くるがねの
 敵のあはひを乗りぬけつ
 わどには戦なほすゝみ
 勝利ますゝ加はりぬ
 かよわき艦も定遠の
 かけちやましてわれも亦
 功名てがらいくよゝも
 火は定遠にあがりけり
 月はのくらくさしいでぬ
 ちりゝにぐる敵艦の

なほうち沈めやきつくせ』
 かちをたえたる捨小舟
 其時かなたに水雷の
 艦こそかゝれますらをの
 ふねより強く末つひに
 列をはちれてゆきすぎぬ』
 すゝむにつれてわが艦の
 中にも赤城は六百頓
 八千頓をめぐしうち
 こゝに折れにしますらをの
 浪にひゞきて音たかし』
 万歳うたふ艦のうへ
 心やたけにはやれども
 行へいそれとえら浪の

立居も見えぬ甲板にかへせ戻せと呼ふなり

奉天府

奉 天 府 奉 天 府
 いざや向はん滿州に
 尙この先に九連城
 流るゝあたりよき敵の
 平壤を只一戦に陥れ
 この勇氣もて進みちば
 九連城こゝを去る事六十里
 早くいゆかん五日にて
 いざすゝめ進めものゝふ
 鴨 綠 江 を 渡 り つゝ
 清の寶庫とたのむなる

わかぬますらをを聲高くかへせもどせと呼ふなり』

落葉

わがさす方は奉天府
 にげたる敵のあとゝめて』
 鴨 綠 江 の 水 青 々
 壘を起してまつときく』
 我 軍 勇 氣 百 倍 す
 百里二百里ものならず』
 この勇氣にて進みなば
 遅くも十日にゆきつかん』
 この城も又一打にうち破り
 長驅して直につかん奉天府』
 都 へ そ こ ぞ 奉 天 府

愛親覺羅が祖先より
 北京の城をおとしいれ
 まづ其まへにせめとりて
 よき日をそこに祝ひてん
 おも 玄 ろ し く
 満州の原風寒くども
 長驅して直につかん奉天府』

墳墓をのこす奉天府
 城下の誓をなさしむる
 わが大君のあれまし、
 韓の北境道けはしく
 この勇氣もて進みつ、

進軍軍歌

いざ進めかしすゝめかし
 すゝみてくに功を立て
 徳をば世界に布かすべし
 その徳ひろむる時なれば
 民を保護して十分の

福 羽 美 静

日本軍勢このとき
 天地につらぬく文明の
 日本帝國万国に
 進みてせめてその土地の
 文明開化をあたへんと

いでたつ軍のこのいくさ
 ついて支那の悪政事
 すゝみて政事を改良し
 もしもそむかばその敵の
 天地の罪人その人を
 はやうちて行け進めかし
 神徳いたゞく日本勢
 天地の心になふべし
 出帥の初歩

さきに朝鮮保護をなし
 それをばせめて戒めて
 日本の徳をばえめすべし
 天地にたがへる敵なれば
 容赦のいらじ討ちてゆけ
 天地のこゝろを心にて
 すゝみ進みて敵をうち
 君のこゝろになふべし
 日本武人の文明ぞ
 平壤義州に難もなし
 鳳凰廳に手を下し
 盛京省をわがものと
 ひかしの夷をうちひらき

時をものべすたちまちに
 その州郡に號令し
 上海香港それづくに
 和合の春をかもしつゝ
 天地にちかひて文明の
 すゝむ日本の義務ぞかし
 百万斤の大砲の
 正しき導火にまたがひて
 いまの支那人本國の
 その時えびす一むれぞ
 年たつうちに腐敗して
 他よりせめてぞ人民の
 大氣を入れて日の本の
 公大至大の法をもて

かの北京をせめつぶし
 旅順も芝罘も後になし
 あまたの船をつながせて
 西洋諸國をよるこばせ
 徳義を宇宙にのぶるまで
 わづかばかりの火口にて
 大氣も動かすものあれば
 ゆけば天地に敵もなし
 いかかる故にて成立ちし
 事をなしえてほこりしも
 その一新はおのづから
 辛苦をすくひ文明の
 万世無窮の帝風を
 亞細亞の草木に被らせ

西洋諸州もろどもに
 すゝめやすゝめ日本人

盛軍の歌

すゝみて備へて敵を討ち
 盛にそなふるわがいくさ
 中央北辰うへもなき
 數万の軍勢星のごと
 盛にとゝなふこのいくさ
 なびかぬ草木のあらぬ迄
 ひかりを海外諸國まで
 智謀勇略神術の
 今より支那の民くさも
 人たる道をとゝのへて
 其身そのまゝ保護をうけ

万歳唱ふる時まで
 いまこそ進むときなるぞ

討ちてすゝみて又勝ちて
 忠孝仁義のそのまこと
 誠の天の御中主
 光をはなちてまたがひて
 日本の軍のその風に
 とゝのへ進みて敵を討ち
 はなつゝ日本の軍なり
 そなはる軍ぞ我がいくさ
 むかしの忠孝をしへある
 盛の軍の下風に
 万世うごかぬ帝國の

盛の軍をあふぐべし
赤十字社の歌

そなはる軍をあふぐべし
菟道春千代

赤心を

そめてぞ色にあらはする
進みゆくてになびかせて
幸なきものを救ふかる
國のため

慈惠もふかき此章旗を
敵をもひろくいつくしめ
仁惠あまねき赤十字』

つくす心のかはらめや
かれと我とのへだてなく
幸なきものをすくふなる
大丈夫の

傷痕になやむ兵士は
助けおこしていつくしめ
仁惠あまねき赤十字』

身をもをかす病なり
かれとわれとの隔なく
幸なきものを救ふなる

わづらひなやむ兵士は
薬あたへていつくしめ
仁惠あまねき赤十字』

たゞかひの
場こそわきて醫師らが
弾丸を抜き取り傷疾を縫ひ
幸なきものを救ふなる
たをやめの

仁術ほどこす時ならめ
血汐ぬぐひていつくしめ
慈惠あまねき赤十字』

かよわき足も風すさぶ
病の床にかしづきつ
幸なきものを救ふなる

婦人従軍歌

菊 間 義 清

火筒のひききどほざかる
ふきたつ風いなまぐさく
わきてすときは敵味方
たふれし人のかはいろい
やがて十字の旗を建て

あとには虫もこゑたてず
くれなるふかし草のいろ』
帽子とびさりそでらぎれ
野邊の草葉にさも似たり』
天幕をさしてにちひゆく

この人々は日の本の
ましろに細き手をのべて
まくや縋帯をたへ
味方の兵のうへのみか
いとねんごろに看護する
あないさましや文明の
いとねんごろに看護する

進軍の歌

ゆく手のうみに騁いらち
さかまく浪はあらくとも
朝日の御旗をひるがへし
すゝむ大和のますらをが
背にたつべき矢のあらじ
くにのみため君のみため

仁と愛とに富む夫人』
ながるゝ血しほ洗ひさり
ころもの袖のあけにそみ』
言もかよはぬあたまでも
こゝろのいろの赤十字』
母といふ名をおひもちて
こゝろのいろの赤十字』

宮 澤 春 文

あゆむ山路にとらは吼え
磐根こゝしくありとても
たまちる劔ぬきつれて
うなぢを貫く弾丸あるも
まづしき家のありとても

老いたる親のありとても
日本をのこよ太刀ぬきて
弾丸こめたるくるがねの
敵の城をばくづすべし
駒のいなゝさいなづまの
さえたる刃に身もさむし
手にぎりもちて敵國の
はらひつくして日の本の
よしこの命のたゆるとも
弾丸あめとふるなかも
おそるゝことかく飛驒匠
いさみ進みて死すとても
國の御稜威をかゝやかせ
棒げまつりしものなるぞ

わすれてつくせ日の本の
あたなす敵をきりたふし
銃先そろへてたてこもる
ひかりの如きつるぎ太刀
忠勇義烈のますらをが
空にみなぎるくる雲を
天つ日かけをかゝやかせ
火矢飛ぶ修羅の巻をも
すみうつ繩のひとすぢに
あたをはるぼし日の本の
かねてこの身のおほ君に

野こえ山こえくさまくら
ひかりもあはれ物すごし
えら雪つもる不二の嶺を
そもや今宵はいかならむ
敵か味方かしらつゆの
あはれや死せる武士の
たとへ異域の鬼となり

偶感

たびねのそらに見る月の
きのふは田子の浦回より
酒くみかはし見しものを
風をまぐささあだし野に
やどるかばねの上に見る
靈は護國の神なるぞ
骨は野はらにさらすとも

琴 洋 漁 史

ま夜なかに つるぎを提げて 見わたせば
はるくと敵の陣營 かすかなり
將 軍 の髯さかだちて 駒いなゝき
命をまつ 猛兵 八千 夜のまづか
いざや乗れあらびや馬
大和にしきの日のみはた

いざや振れ日本刀
前にさゝふるものなけむ

敵をかたなのさびとなし
萬里の城のあさかせに
渤海灣のゆふまほに
氣のいさみ かひかり躍りて
見あぐれば 長白山に
見おろせば 鴨緑江に

生 別

湖 處 子

三年のむかしわがせこが
日數よみつゝかへる日を
いくさおこりてわがせこも
はるけき道を營所まで
こゝろいためそこの度の
やがていさをも名もたてゝ
こゝろやすげにせいのへど

駒のひづめにかけくれむ
日の御旗をばさびかせて
かたさののりを洗はゞや
敵の かた
月あをく
水さむし
兵にめされていにしより
待つるかひもあられなき
支那朝鮮へゆくときゝ
いそぎてせこを尋ぬれど
敵のよわしときくからに
かへりこん日をまつべしと
妾が思ひさにあらず

いまの逢せをいとまごひ
おもへば胸もふさがりて
切角いさめるわがせこそ
まばしいうしろふりむきて
きみがめてたきかどいでに
花々しくもいくさして
さいさりながら君と我
營處をいでゆるくど
といへど軍法きびしくて
さくになしさをさけなさ
持て來し肌着とりいだし
妾もきみがあととめて
女の身あれば甲斐もなし
妾ありとも見そなはせと

今日の別をわかれぞと
いふべき事も知らねども
なかすは女の愚痴ありと
わきくる涙かみまめつ
いましき涙のはなむけじ
かへります日をまちぬべし
わかれて月日すぎぬれば
つもるはあしもせまほしく
外にいづるをゆるさじと
これもうき世とあきらめて
心にまかする世にしあらば
いづこまでもとおもへども
せめてのこれを身にそへて
渡すわがみも受る身も

たばしる涙とめかねて
軍人たらん身いつらし

* * * * *

このあさぼらけ有明に
今ひとたびとおもへども

弟の從軍をおくる

かの國いかにひろくとも
なと及ぶべきうちそとの
かの銃いかにするときも
なとおよぶべきわが國の
かの兵いかにおほくとも
なと及ぶべきますらをが
うち見の強く美々しきも
形もとめず解けうせん

ともに袖をぞまぼりける
その妻たらん猶つらし

* * * * *

大軍營所をうちたてば
いづれわかせと見えわかす

嘉悦博矩

かの民いかに富むとも
わがくにたみの協心に
かの鋒いかに利きとも
日本刀のきれあぢに
かの將いかにたけくとも
身にもつ日本だましひに
かれの澤邊のうきまほり
のぼるあさ日の旗かげに

この協心をうしる楯
この勇ましきころもて
彈丸のあられど降り來り
きらめく中もすゝみゆき
君のためなりくにのため
わが親愛あるますらをよ

兵士の渡韓を送る

いざやゆけ〜いくさ人
かゞやかすべき時の來ぬ
からくに人がうちいだす
つるぎの林なすとても
何をおそれむなにをかい
もし幸なくてたゞかひの
くにのはしらよ大丈夫の

風に此旗ひるがへし
日本刀をふりかざし
つるぎの空のいなづまと
斬れやかたきの素首を
つとめよ勵めおくるなよ
わが名譽あるつはものよ

築紫賤子

すめら御國のみいくさを
物のことわりわきまへぬ
彈丸はあられど飛來ども
大和だましひあるものゝ
ためらふ事のあるべきぞ
にはに屍をさらすとも
かゞみと世々に稱へられ

香はしき名の残るらん
いざや行け〜いくさ人

雨後月

青葉まげれるまどのもと
この水無月のあつき日を
庭のこずゑにちくせみの
かこつこのころ玉ちらす
高麗の海邊のたゞかひに
さくいられしく思へども
唐のえびすをうちはらひ
聞くいられしく思へども
土もさけなむみなづきの
とゞろく彈丸のその中に
汐もにえなむこのころの

きみと國とのそのために
いざやゆけかし軍びと

かざしの花子

文よむだにもたへがたき
高麗の荒野やいかならむ』
聲きゝてさへあつき日を
筒のひゞきやいかぢらむ』
えびすの艦をうばひつと
我はらからやいかならむ』
牙山の城をとりにきと
我はらからやいかならむ』
照る日の下にさらされて
いくさやすらむ同胞の』
あつき海路にたゞよひて

さかまくなみのその上に
 草むすかばねやま行かば
 すめらいくさに先がけて
 名さへ正しきみいくさの
 國のためにとおもへども
 高麗の荒野やいかならむ
 ながむるそらに雲いで、
 風にきほひていなづまの
 ゆふだつ雨のすぎゆけば

夏夜の夢

海ゆかば水づくかばねと
 このころいづこの海の
 豊島のいくさにかちし
 威海衛衝きしみふねも

いくさやすらむ同胞の
 水づくかばねぞ海ゆかば
 いのちは捨てよ益荒雄は
 さきがけをして我もまた
 女の身こそかひなけれ
 支那の海邊やいかならむ
 かみ鳴りわたる夕まぐれ
 ひかりもすこく一しきり
 木の間にすし月のかけ

伊藤詮子

うたひとつ行きし我夫子
 あら浪にたよひるます
 その艦にわがせいのらす
 その艦かそれかあらぬか

えびす舟ふかくかくれて
 わがせこののらす御艦も
 威海衛ゆふべにとりて
 旅順口あしたにやぶり
 えびす舟かくろひかねて
 うち沈め小ふねのすて、
 日の御旗たゝくかゝげて
 大みふねうちつらなりて
 その日のみまたれくして
 あらいその浪にはくだけ
 わたの原なみのまにく
 たよふのえびすを載て
 このゆふべ見し寫し繪の
 わがせこののらす御艦の

渤海の外にいでぬまの
 みいさをい又となからむ
 大ふねをみおとにつせへ
 渤海のおくに入りませ
 ちら浪のたちてむかは
 おは艦のうばひて來ませ
 凱歌のこゑいさましく
 港べに見えむいつぞ
 夏の夜のみじかきゆめの
 汐さゐのかせにやぶる
 帆ばしらのうきつ沈みつ
 沈みにしふねにやあらむ
 そのまゝに夢にも入りて
 みいさを、又もまのばす

夜ぞとく見るも嬉しく
 あらうみの浪のくだけで
 日の御旗たかくかゝげて
 大みふねうちつらなりて
 わけやすき夏のみじか夜
 海ゆかば水つくかばねと

秋 曉

木のはをちらす秋風の
 どらふすのべのいさましき

仲秋月

千里のはかも目にうかぶ
 かゝるならひのむら雲も
 月にむかへばなにどなく
 ましてこよひの月見れば

いさましき御艦のいさを
 えびす舟たよふばかり
 凱歌のこゑいさましく
 湊べに見えむいつぞ
 いくたびもさめてぞ忍ふ
 うたひつゆきし我夫子

あさかせ

あさけの窓におどづれて
 矢叫の聲つたへけり

伊 藤 詮 子

こよひの月のさやけさよ
 こよひのはれて秋たかし
 あはれもよほす物なるを
 千々に物こそおもはるれ

わがおほ君のたましきの
 おほみこゝろの廣島に
 こよひの月を津のくにの
 見そなはしつゝ夷うつ
 高麗の荒野にえみし撃つ
 堡おとしてをかのべに
 支那の海べにえみし撃つ
 おくにせめ入り船の上に
 大旗小旗ちりぐに
 荒野にのこるえみしらの
 えびすの舟のくだかれて
 波にたよふ帆ばしらを
 高麗の荒野にえみしうつ
 わが夫いかにどこの月を

みやこ出ましはるくと
 きのふむかはせ給ひけり
 神戸みなどのみたびやに
 いくさの上をや思すらむ
 ますらたけをい平壤の
 こよひの月やながむらむ
 ますらたけをは渤海の
 こよひの月やながむらむ
 劔も銃もうちみだれ
 かばねを月の照らすらむ
 うち沈みけむそのあたり
 こよひの月は照らすらむ
 いくさの上を思ひいで
 妻の見るらむふくるまで

雲いので、月かげくらく浪たちぬ
 面しろし、夜半のあらなみ逆まは
 その中のに、明日やうづめむわが屍
 凱歌の、こゑいさましく謠ひつゝ
 音樂の、ふしおもしろく歸らずば
 艦の上の、ますらたけをの打ならび
 月見るも、こよひかぎりぞ大海原
 いざあすは、まづ旅順口うち破り
 渤海の、そのおくふかく攻入らむ
 凱歌の、こゑをさかすばそこの月
 明日は我、かばねをてらすかみの上
 『すゝめますらをいざ進め』
 國と君とにさゝげつる 命をいかでをしむべき
 紅涙 小 萩

大和だましひ人の見よ
 大きさわれに優るとも
 堅さゝわれに勝るとも
 やまとだましひ打こめて
 彈丸にくだけぬ艦やある
 まづ旅順口打やぶる
 そのおくふかく攻入らむ
 浪のむしろの、大うたげ
 くみもかはさむ、ひと杯を
 こゑこそさゆれ、夜半の月
 くみかはしつゝ、謠ひてむ
 水づくかばねと、豫てよ
 さゝげまつりし、此いのち
 聲もしばらくやみし時

ひかりもさむき日本刀
 衣たちぬひし少女子は
 弟のつくゑにひろげたる
 歌ふまもちくたちまらに
 わないさましきこの歌よ
 ひろき都にかくれなき
 思はざりけりかくばかり
 するとき歌を見るにだに
 思ひぞいづるから國の
 旅寢のゆめやいかならむ
 裁縫とゞめつくぐと
 おもひに沈むかたへより
 はしりかけ來し弟は
 そらながめゐる少女子の

かざしつれつゝ進みゆけ』

『支那征伐の歌』とりて
 この一ふしを見出でたり

歌人の作と聞きつれど
 鋭きふしのあらんとは

雲のよそなる兄うへは
 聞きもおよばぬなみ風に

菟戸ひく手もあらゝかに
 身をなげよせてその膝に

顔うち見あげこゑたかく
 成歡驛のたゞかひも
 やがてかへらむ兄うへは
 のぼるあさ日の旗かげに
 拍手のこゑにつゝまれて
 うれし〜と呼びくるひ
 すがる弟をいましめて
 なほもの思ふ少女子の
 くにと君とのみためぞど
 玄のび堪ふれと兄うへを
 忘るゝすべもと打笑みて
 『もゆるがどとき甲板に
 暑き玄ほかせ身にうけて
 ゆきゝいかにと海上を

ものなればしそあね君よ
 日本勝利とわれきゝぬ

金鵝の勳章かゝやかせ
 やがてかへらむ兄うへは

わが家のよそに出しつゝ
 心よあはれいたましや

戀ふるおもひぞ盡がたき
 又も手にとるまへのうた

よるも夜すがら敵艦の
 まもる兵士よいかあらむ』

祭南州先生

その名ばかりを打きよて
よきにあしきにあげつらふ
あはれ抱負は大ぢがら
英雄偉人の身のをはり
我馬倒れ我矢つき
むなしく屍をとめたる
猛き武臣のこゝろをば
あたら熱血の征韓論
國威を外夷に玄めすべき
真心にききあらそひに
賊といふ名はなげかねど
真心になきあらそひも
その名あたる城山に

青電白虹樓主人

その跡のみをながめつゝ
つたなき史家のよにあらじ
時機にたがひて遂げざりし
誰か涙のなかるべき
あき風寒さふるさとに
薩摩をのこのあはれさよ
歌よむ公卿の知るべきか
愚論と笑ひてすてられぬ
いくさもせんと願ひしを
賊といふ名も負ひにけり
國威を玄めすはいつの時
ことわりありと知るやたれ
敗れし人の靈まつり

かさねくゝて今日こゝに
かはればかはる世の姿
王師十萬海をこえ
天皇陛下のかしこさも
こたびの軍に世に知れて
かゝる時しも君あらば
子弟三千ひきつれて
このみいくさを君しらば
恨もはれていかばかり
けふの君への手向には
えみし討てどの大みこと

從軍行

日本刀

日本刀の太刀さきに

十八回の秋は來ぬ
今はえみしを討つために
捷報しきりに耳をうつ
大和男兒のをしさも
朝日とあがる我國威
空しく果てしのかみの
いかなる軍かなすならん
あらそひたりしのかみの
うれしとえみをや含むらん
讀經もあれど大君の
われはよみつゝ捧げてん

石 森 和 男

手向ふほどの敵やある

飛ちる火玉蹴散して

日本魂

やまと魂みがきつゝ
かねて鍛へし此腕を

屍に草

屍に草は生ひむとも
死して甲斐ある此命

群る夷

群るえびす斬はふり
駒に水かひいざ進め

鯨波の聲

鯨波の聲あげ諸共に
今ぞ北京に攻入りて

海戦大捷

賊のはらわた破るべし

忠實勇武のますらをが
試さむ時こそ來りけれ

月に屍はさらすとも
正義の爲に惜からず

はや平壤は乗り取りつ
鳴綠江をばあとに見て

さへぎる敵を斬まくり
朝日の御旗押し立てむ

瀬戸生

我日本の艦隊は
朝鮮沖を横断て
偶々たなびく黒烟
益々勇み近づけば
進みて齊しく打出す
假装のものゝがら
まさしく敵の中に入り
敵は得たりと思ひけむ
此機を待し我艦は
打込む彈の限なく
沈めし艦も多かりき
残れる艦は疵負て
其戦のすさまじさ
其戦のすさまじさ

舳艫啣みて進み出で
黄海遙に見渡せば
定めて敵の艦ならむ
果して敵は群れり
中にも我の一艦は
軍令部長の旗高く
圍めよ打てと挑みたり
四面圍みて打向ふ
縦横自在に旋轉し
群がる敵を撃破り
焼きたる艦も多かりき
渤海指て逃れたり
四方の山をも崩すらむ
四方の國にも響くらむ

國風 出征調

車 麟々 馬 肅々
 あし並そろへていさましく
 まつまほどちく嚙唳と
 居るときまばし轆轤と
 端なく肉そるに動き
 あすをも知らぬ武夫の
 わかれゆくへをまらま弓
 なれし妻子をふりすて、
 思へばとほきたび衣
 かくて止べき事ならねど
 名残もさぞとおもひやる
 國家の爲となげかじな
 いざや別れん都人

蜻 蛉 子

輝く劔吹なる喇叭
 進むや至る停車場
 響を送る氣笛のこゑ
 音を傳ふる機輪のまらべ
 覚えす心暗に驚く
 八十氏川の瀬をはやみ
 はるかに向ふつくしがた
 親しきとちをいとまごひ
 みのほまれなりいくさ人
 あとにとまるひとく
 まかはあれども吾も人も
 忠義の道を迷はじよ
 さらばこゝにて軍人

いでこゝろよく出征し
 亂れたる世を打治め
 やがて功なり名をとげて
 凱歌を、しくふるさどに
 けふ九重の宮の内
 空にはれたる不二つくば
 その時こそいいでむかへ
 さかゆく御代をことほがめ

戰勳調

あゝたが爲の名あればか
 惜むをしまぬ名にいのち
 つはものどもこのろねを
 野にふし山にふし竹の
 辛をまのぎ酸をなめ

敵をほふりあを斬り
 疲れし民をなでやすめ
 再あはんこのところ
 錦着かざる雲の上や
 玉の盃たまはりて
 道あるみよを仰ぎなん
 いさをしほまれ譽めたへ
 榮ゆく御代をことほがめ』

おのが身よりも惜むらん
 命にかへて名を惜しむ
 思へばかなしことつ國
 直なるまこと壹筋に
 あたをはらひて功高く

敵を破りて戦烈し
いのちは霜と失せぬとも
かぐはしき名はくちせじな

戦勝調

長白山の秋たかく
外國はるかにいでゆき
うからやからの如何にぞと
あらひ果敢なしものゝふの
かねて捧ぐる決心覺悟
あるひは陸にあるは海
血は漂はす長城窟
龍躍るとき虎うそぶき
奇勳あらはす平壤城
トラフハーガーといふ勿れ

たどひ其身のつゆときえ
千代万代ののちまでも
かぐはしき名は朽せじな

鴨緑江の月寒し
故郷とはく思ひやる
問ふ事かたき戦陣の
つゆの命も國のため
將卒ひとしく一致して
興に激戦奮闘し
屍は塞く涿鹿野
雷走るところ電掣く
善功あぐる海洋島
コロンスタツを説きなせそ

歌へや歌人

うたへや歌人うたへかし
うたへや歌人うたへかし
筆とるもはた太刀とるも
太刀とるもはた筆とるも
うたへや歌人とる筆の
謠ひくしてまかばねを
まきまのますら武夫の
山ゆかばくさむすかばね
うたへや歌人なれもまた
月ゆきはなのあはれのみ
筆とりてうたひはげませ
筆とりてうたひなだめよ
夫をやりしそのつまを

落

葉

たぐひまれなるみ軍を
きみのためまた國のため
大君に仕ふる道は一つなり
國の爲盡す務は一つあり
其いのち毛のあるかぎり
歌のひろ野にさらせかし
かねてより大君に命は捧ぐ
海ゆかば水づく屍と兼てより
おなじ御國のますらをよ
うたふが汝のつとめかは
君が爲軍にむかふ兵士を
國の爲子等出しやりし其親を

征清の歌 (以下竹柏園社中作)

大橋 文之

二千五百有餘年
天地の正氣こりてなる
いざ此こゝろふりおこし
すゝめますらをすゝむべき
秋の尾花のそでにちる
いくるかひを撫てゝこそ
折こそよけれこの涙
旭のみはたおしたてゝ
ほのはさかまく地雷火も
わが大きみのかしくも
たのみましゝぞこのいのち
旭のみはたおしたてゝ

きたひおきてし心あり
やまと魂これなるぞ
旭のみはたおしたてゝ
時は來にけりますらをよ
露よりもろき涙あり
やせたる骨をなげきけれ
つるぎの上におきかへて
進まんときは今ぞ今
ふみて死すべき命あり
朕汝等を股肱ぞと
敵は幾万ありとても
進むに何かためらはん』

夏 尙 寒 白刃の
憂もほまれも汝等と
ちかひましゝぞ此わが身
旭のみはたおしたてゝ
忠と勇とのまごゝろに
光結びて聲ぞする
野に打ふれば虎もにぐ
旭のみはたおしたてゝ
勇と忠とのまごゝろに
おさばとりでもたふすべし
四海の權もにぎるべし
旭のみはたおしたてゝ
彈丸つきて後にこそ
わがものゝふは潔く

下にもたふれん此身あり
共にすべしと大きみの
はむかふ敵のたゝ中に
進むに何かためらはん』
きたひおきてし劔あり
淵にのぞめばみづちふし
このつるぎたちぬきつれて
進まば何かならざらん』
きたひおきてしかひなあり
うたば城をもつぶすべし
この我かひなふりたてゝ
進まば何かならざらん』
つるぎも折れて後にこそ
朝の露ときさえもせめ

彈丸つくるそれまでは
 旭のみはたおしたて、
 遠くは打ちて沈めてん
 彈丸白刃こゝにあり
 いかで茜のいろ深く
 旭のみはたおしたて、
 よし彈丸はつきぬども
 いかで一步もひくべきぞ
 千里の原にすむといふ
 旭のみはたおしたて、
 旅順口また威海衛
 わが彈丸の一發に
 かばねに海をうづめつ、
 旭のみはたおしたて、

つるぎの折れんそれまでは
 進めよ進めやよ進め』
 近くハ入りてきりふせん
 夕日うつろふかげならで
 そめでおくべき支那の海
 尙もす、まん軍ぶね』
 よし白刃はをれぬども
 はむかふ敵をどりこにし
 うゑたる虎にあげやらん
 進めよ進めやよ進め』
 彼は地の利にはこるとも
 敵の軍艦うちくだき
 ふみて渡るハいとやすし
 進みてゆかん北京城』

敵の軍勢、一百万
 ひらがる蠅を何かせん
 長白山もうちこえて
 旭のみはたおしたて、
 忠義にあつきますらをが
 屍の山をきづきつ、
 山の端遠く霧こめて
 旭のみ旗おしたて、
 勇武にとめる武夫が
 ちしほの川を流しつ、
 霜より白き劔たち
 旭のみはたおしたて、
 みそらにか、やく天つ日の
 世界ハひろし海原ハ

かれは多勢をたのむども
 我兵ひとたび向ひかば
 万里の長城のりこえて
 直につかん北京城』
 ひらがる敵をふみころし
 後の世までも名をのこせ
 戦馬いな、く東明に
 進むにたれかむかふべき』
 よせくる敵をきりころし
 後の世までも名をのこせ
 光斗牛をつく夜半に
 進むにたれかあたるべき』
 神のみ末の國なるぞ
 遠しといへど天つ日の

いづこ照さぬ國かある
旭のみはたおしたて、
天下の正義たてとして
やまとをのがうたふなる
八重の汐ちをはるく、と
旭のみはたおしたて、

征清の歌

え、追ふさつを山を見ず
光か、やく日のもとの
戦の庭にかぞでして
むらがる敵は雲と見よ
我身を忘れ國の爲
ことば、今も耳にあり
屍はつみて山となり

錦のみはたふりかざし
進むにたれかど、むべき』
天下の公道ふみてゆく
凱歌の聲もいさましく
舟のほばしらいや高く
かへらんとさのはやも來よ』

祐乗坊釵郎

つりするあまは海を見ず
ますらたけをは敵を見ず
誰かいのちををしむべき
ふりくる敵は雨と見よ
つくせといひし父母の
いざや死ねかし諸共に
血はながれつ、海となる

軍の庭に身をすて、
我君のため國の爲
富士の高ねのいと高さ
あなよるこばし千萬の
いざや諸人駒なべて
萬里の城も破れけり
み空にか、やく朝日子の
大和心の優しさは
紅葉のにしきかざしつ、

征清將軍

もろこし人のつみ討てど
貔貅をすべてわたつみの
健男のくにとむかしより
威風をえめさん時機は今

すめらみ國にいざつくせ
うせし屍はくちぬとも
ほまれは千代に傳ふべし
あたは跡なくなりけり
ありなれ川に水かはん
北京の城もおちにけり
みはたの影ぞ勇しき
外國人も仰ぐなり
いざやかへらん故郷に

村松治作

きみのみことぞ三軍の
浪路やぶりていざゆかむ
世にも知られし日本の
ときは今なりいざゆかむ

雞林八道なびかせて
いさめるこまの鐵蹄に
北京の都城うちおとし
東洋霸王の大みはた

皇國の民

ゆふ風すゞしき高どのに
歌ひつ舞ひつうちくるふ
おいたる母をのこしつゝ
いさみ進みてつはものに
口にうまきをあぢはひて
なほあきたらず奢れるの
かてうち食ふひまもなく
進みたゞかふものゝふの
きのふは西の野にあそび

四百餘州の山と川
ふみ破るべくいざゆかむ
渤海灣のあさかせに
うちたてぬべくいざ行む

竹屋 雅子

うたひ女侍らせ酒くみて
人のみくにのたみあるか
妻子のなげきあとにちし
いでにし人をおもひやれ
身にいにしきを纏ひつゝ
みくにの民といふべきか
ぬれたる衣ほしもせで
そのありさまを思ひやれ
今日のひがしの芝居見て

かひなき事に日をおくる
杖もたのむ子にわかれ
今日の烟をたてかぬる
箱根 鎌倉 大磯 と
あそび楽しぶひとくゝの
虎ふす野べもことゝせず
いさみ進みてたゞかへる
すめら御軍のさきがけに
雨あす彈丸のそのなかに
さかまく浪のそのうへに
國の御稜威をかゝやかす
富めるやからは黄金もて
まづしきものは勞力もて
あどに残れるはらからの

人のみくにのたみあるか
力とおもふ夫にはちれ
兵士の妻子をおもひやれ
涼しきところもどめつゝ
おなじみくにの民なるか
さかまく浪もものとせず
わがはらからを思ひやれ
どつ國までもたちいでゝ
山なすあたをうちはらひ
あたのおは艦うちまづめ
わがはらからぞ勇ましき
いくさの資をたてまつれ
御國のためむくいなむ
費をはぶきわざをはげみ

御國のためにつくしてぞ

日本兵士

あな心地よやいさぎよや
海に山べになびかせて
御代の光をますらをが
かゝやかしたるいさをしを
このいさをしの心地よや

日清開戦の歌

をさまる御代もはた年に
今年ばかりいさみだれの
うち續きつゝいつしかと
あつささかりとみな人の
わが日の本ともろこしと
えみしうつべき御言のり

御國のたみといひつべき』

西 升 子

我日のもとの日の御旗
わが大君のくもりなき
高麗唐土のはてまでも
うたへやうたへ國民よ
ますらたけをのいさぎよや

一 川 虎 子

あまる七つとなりけり
頃とはいへど日でのみ
はやみお月になりけり
もて惱みつる折しもあれ
ちぎりしおきて打やぶれ
今はいでけりいでにけり

國のまもりのつはものよ
時は來にけり千歳にも
朝日のみはたひるがへし
土さへさくるそのころに
こゝろあはせてうち出す
えみしのとも立べきぞ
高麗の海べのたゞかひに
とりこにまつと聞だにも
わたのそなへをうち破り
ますくゝいさみ進みゆき
うちたひらげてかの國の
あまたとり得て日の本の
御稜威を四方に輝やかし
うたひつれつゝもろ共に

大和だましひまめすべき
ためしまれある御軍ぞ
いさみはげみて進むべし
命をしまぬひとくゝの
銃のもどにいいかでかは
えみしの伴のたつべきか
えみしの艦をうちまづめ
うれしきものを今はまた
かなめの城をうちとりぬ
こゝろ驕れるえみしらを
大づゝ小づゝいくさぶね
御稜威を四方に示せかし
わがおほ君のよろづ代を
にしきかざして歸れかし

にしきかざして歸るべき

朝鮮海

夜かせつめたき朝鮮海
 きらめくひかり物すこし
 うちかはしたる筒音も
 あらしたてたる波の音も
 うちまづめたる敵艦は
 とりことなりし操江號
 勝利をまめてわが艦は
 かちどきあげてわが艦は
 勇をかくしておもむろに
 まづかに海をわたりのく
 きたひみがける甲鐵艦
 夜つゆむすべる甲板に

大和ま根のますらをよ

大塚楠緒子

星かげふたつ三ついつゝ
 今日しもありし激戦に
 ちひろの底にきえはてぬ
 ねふるか如くまづまりぬ
 いづこに遠くのがれけむ
 將士のこゝろいかならむ
 怒をまづめし獅子のごと
 わたをかみにし虎のごと
 猛ををさめておだやかに
 日本男兒の鐵腸を
 ひるの暑さのきえはてゝ
 ひどりたちたる一勇士

いづこの空かながむらむ
 千々の思ひにとぢられて
 今日 第一の海戦に
 されどこののち敵いなほ
 斧ふりあげてむかひなほ
 危急の時のありぬべし
 命いつゆもをしからず
 羈絆には猶ひかれつゝ
 そらをあふげば雲とちて
 わがいでたちし其あした
 見おくりに来ぬ妻も子も
 父よとくくかへりませ
 必らず土産をど請たりき
 いさをたてゝ歸り來と

さすがにたけき強者も
 まばしい心もくもるめり
 勝利を得しぞ心地よき
 きそひたちつゝ螭螂の
 堅固無双のわが艦も
 君と國とにさゝげてし
 惜しからねども恩愛の
 かへり見らるゝふる里の
 さかまく浪のおとたかし
 おくりたまひさちゝと母
 まだいはけなき幼子は
 忘れまますあよ好き土産を
 つゑつさませる父とはゝ
 われを勵ましのためへど

御顔のなみだひるまなく
 いはずかたらぬ胸の内を
 つるぎをわれに捧げにき
 また歸らじをふるさとの
 戀しとまばし沈みしが
 はづかしかりき我ながら
 いかで士卒のはげむべき
 うちつゞきてぞ響くなる
 あなこゝちよしわが勝利
 敵地にすべてのり入らむ
 敵のみなどにはうちいりて
 目にも見せむ清國に
 きたひみがける甲鐵艦

進軍々歌

御聲もいたくふるへにき
 汲みえる妻のことばなく
 存らふる身にあらざれば
 玄のばるゝかな日本國
 たちまち心をとりなほし
 かゝる未練の將にして
 をりしもくがに砲聲の
 野營の兵の演習か
 くがには陸軍突進し
 いかでおとらむ海軍も
 砲臺すべてうちくづし
 日本男兒の鐵腸を
 あゝこゝちよしわが勝利

鈴木政範

剛慢不遜の清國を
 開化の域に進むるの
 されはかしく我皇は
 下し給ひし勅詔に
 帝國の光榮を揚げんとの
 さるを清國無禮なり
 非望の欲をみたさんと
 責こらすこそ義に厚き
 進めや進めいざ共に
 平和をまもるためにして
 清軍いかに多くとも
 日頃みがさし日本刀
 鴨綠江も乗越えて
 鳳凰城を打破り

我文明にみちびきて
 日本男子のつとめなり
 忠實勇武の有衆に
 「朕は平和と終始して
 叡慮の程こそ尊けれ
 徳義も平和もわきまへず
 敵意をしめす清國を
 日本男子のつとめなれ
 進みて討つも東洋の
 正しき道の刃には
 いかでか我にむかふべき
 切れ味みせん時は今
 九連城を攻落し
 息もつがせず一齊に

進めや進め北京まで

攻 壘

我大君の爲あれば
忠勇世界にちらびなき
年月磨くこの劔
日頃きたひし此腕の
進め進めの號令に
玉ちる劔ぬきつれて
右に左に切りぬけて
難なく越えて敵壘へ
成歡驛の險により
清軍必死とふせげとも
息もつかせず攻めければ
とりわき堅き壘壁も

進みて取れや北京城

死すとも一步も退かぬ
我日の本の益良雄よ
試さん時は今なるぞ
續かんかぎり試しみん
日頃の勇氣百倍し
彈丸雨飛のその下を
沼田も川もなにのその
攻寄せたるぞ勇ましき
山と川とを楯として
いかで撓まん日本兵
敵の大砲槍劔
いともろくこそ崩れけれ

忽ち敗る、清軍は
或は逃げゆく其さまは
勝にかちたる日本軍
うち靡かせて一齊に

我 國 歌

たれかいひけんわが國は
四時の氣候のおだやかに
あを人ぐさもはらつみ
いくとつ國をかぞふとも
たれかいひけむわが國は
扇に似たる不二の峰
あるいはなさくよし野山
數へつきせぬをりくの
たれかいひけむわが國は

道失ひて死するあり
木葉の嵐に散る如く
朝日に輝く日章旗
唱へし凱歌ぞ勇ましき

大 橋 文 之

東の洋の孤島ぞと
五穀ゆたかにみのりつゝ
うちてたのしむ大御代は
更にたぐひなきものを』
ちがむるところ少なしと
八つのけしきの琵琶の湖
ある月すむすみだ川
けしきいたぐひなき物を』
人の背ひくしかよわしと

忽 必 烈 の 軍 勢 が
 生 きて ぞ い に し た 三 人
 四 百 餘 州 を ふ る は し き
 た れ か い ひ け む わ が 國 の
 わ が 帝 國 の 海 軍 の
 敵 の 軍 艦 と り こ に し
 敵 の 三 艦 う ち 走 づ め
 た れ か い ひ け む わ が 國 の
 わ れ よ り 我 を い ふ な ら ず
 い す づ の 川 に か め あ そ び
 神 代 な が ら の わ が み く に
 た れ か い ひ け む わ が 國 を
 國 の か た ち を い ふ な ら ず
 い や 年 の は に す み つ

攻 め て き た り し そ の 時 に
 ま た 太 閤 の 明 國 の
 勇 武 た ぐ ひ の な き も の を
 海 の い く さ に な れ じ よ と
 豊 島 沖 の た ぐ か ひ に
 海 洋 島 の た ぐ か ひ に
 わ ざ に た ぐ ひ の な き 物 を
 東 の か た の 君 子 ぞ と
 よ そ の 國 よ り 走 か い ひ き
 千 代 田 の 宮 に つ る ぞ 舞 ふ
 何 處 に た ぐ ひ あ る べ き か
 東 の う み の 英 國 と
 世 の 開 け し を い ひ つ ら む
 五 つ の み な と 三 つ の 都 府

に ぎ は ふ 民 の ゆ た け さ ん
 か へ る み 國 に う ま れ 來 し
 か の 清 國 は い か な れ ば
 ま た 朝 鮮 を み だ し ぞ
 い か で 其 ま お く べ き ぞ
 い ま や 清 國 征 討 の
 八 重 の 汐 路 を う ち わ た り
 北 京 の 城 を 攻 め お と し
 ほ ど と 後 か ら じ 今 は や
 軍 資 献 納 の 歌
 我 日 の も と に 生 れ こ し
 い で や わ れ ら も こ の た び の
 國 々 よ り も く し の は の
 所 い づ こ い づ み な る

い づ こ に 類 ひ あ る べ き か
 我 は ら か ら よ く も き け
 す め ら み 國 を は づ か し め
 無 禮 き は ま る 清 國 を
 我 は ら か ら よ く も 聞 け
 わ が 海 陸 の 軍 隊 の
 ふ か く か の 地 に 入 め る ぞ
 城 下 の 誓 せ し む る は
 我 は ら か ら よ 走 ば し 待 て
 世 の は ら か ら ぞ た の も し き
 軍 の 費 に さ げ ん と
 ひ き も さ ら ざ る 其 中 に
 ひ ち に 住 み け る 男 あ り

身にはつれをまとひつゝ
 涙を袖にぬぐひつゝ
 『ものぐるはしやから人の
 大刀ふるわざもゑるならば
 いゆき渡りてわれも亦
 きりてんことのあるべきに
 何せんわざもなみだなり
 わざなすひまにたくはへし
 この時少女をかへり見て
 装ふ衣だにあらざるを
 思ふの親のちらひにて
 さればことしのたま祭
 衣あたへんどかねてより
 友のきぬをもうらやまで

少女三人をひきゐきて
 その司にいひけるは
 去このふるまひいとにくし
 筒とる身にもありたらば
 あたのかうべの一つだに
 もとより貧しき賤の男の
 こゝに年月おこたらで
 こがねいさゝかつもりけり
 『あつさ寒さの折々に
 よその見るめもはづかしと
 少女もさぞや侘びつらん
 まつらん折に新しき
 契りおきしにわが娘
 國のみ爲とあるならば

わが身の衣の何ちらず
 千さとの外に渡りつゝ
 夜いつるぎを枕とし
 そよふく風の音にだに
 くさ木ををるゝ暑き日も
 夕風わたる月かげも
 衣やいかにやれつらん
 その人々にくらぶれば
 なほおほけなく覺ゆなり
 いざもろともにさゝげんど
 納めてよ』とてやさしくも
 ことばの葉末露おびて
 司の人もとりくゝに
 こまもろこしのますらをも

山より高き白浪を
 こまもろこしにある人は
 ひるいものゝぐ肩にして
 安き心もなつくさの
 いこふ間とていなるらん
 すゞしとあふぐひまあらじ
 汗にやいかに汚れけん
 つゞりの袖もわが身には
 ひどへばかりの料しちなれど
 思ひたちてぞ侍るかし
 秋野の草のそれならで
 いともおもげに見えにけり
 涙ぬぐひてをさめけり
 かくとしきかば國たみの

あつき心をいかばかり
うべもいひけりまき島の
朝日に匂ふ山ざくら
心ぞ國のならひなる
我大君のみ國には
今のこがねも山をなし

初紅葉

虎伏す野邊のたゞかひに
かちどきあげてたゞかへる
着せてんものと山めぐる
大和にしきを織りそめし

月に對して吾兵をおもふ

いくさがたりにさ夜更て
もろこしの野につはもの

うれしどこその思ふらめ
やまと心を人とは
花の香よりもかぐはしき
つとめいそしめ武夫よ
花の香ならぬ人もなし
たからもさはにみちみてり

大原恒齋

唐土人をうちやぶり
ますら猛夫に山ひめは
時雨をぬきの糸として
色こそ朝日に匂ふなれ

大塚楠緒子

あふげばそらに月きよし
かちどきあげて眺むらむ

うちもらされて遁れゆく
あと追ふ皇國のつはもの、
勝鬨あげてつはもの、
おちゆく敵はなかくくに

成歡戰の歌

四方のかかり火きえうせて
わがものゝふのとりもてる
雲間をもるゝ月かげに
折から風もふきいでゝ
草ばを傳ふ露ならで
そゝろに凄きぬは玉の
いでやねぶれるから人の
そなへを三つにわかちつゝ
二手は既にゆきにけり

わたの行方をてらしつゝ
みちまゐるべする月のかげ』
さやかにあふぐつき影も
うしろめたしと詠むらむ』

大橋文之

見渡すかぎり夜は深し
つるぎの光きらめきて
いなゝく駒の聲すあり
月は雲まにかくれけり
かすかに響く鐘ならで
闇には聲もなかりけり
ゆめさまさんと武夫は
成歡さして進みけり
一手も今は時よしと

いそぎてゆけば安城の
松崎大尉は聲たかく
細き流をわたらん
進めようての一聲に
とびくる弾丸をくゞりつゝ
早せも爲によとむらん
はげしくときを聲をあげ
秋の野末の露おもき
野分の風のはげしくも
のこる木葉もちりぐゝに
あられの音のすさまじく
まかはあれどもくちをしや
大尉はつひにたほれけり
思ひしものをはかなくも

橋はたえたり半より
橋はたつともかばかりの
ためらふ事のあるべきか
もとより勇むはやりをの
きそひてわたる勇しさ
打いだすつゝの音よりも
きそひすゝみてかけ向ふ
まの原まのを亂しつゝ
ふさいでたるに異ならず
み山おろしにさそはれて
さとたばしるに似たりけり
それたる弾丸に松崎の
ときはの色の長かれど
かれにしこそいやくしけれ

されど味方はうちかちて
にぐるを追ひて成歡の
夜はほのくゝと明方の
山の端遠くながむれば
黄龍の旗なびきつゝ
朝日のみはたおしたてゝ
右に左にときのことゑ
雷なせる大つゝの
飛びかふ玉は數しれず
黒きけぶりをおし分て
まきたつ山のあら風の
朝日のかげにひらめかす
むきて見るべきやうもなし
たけきこゝろは天地も

あたのかばねをふみしだき
ほとり近くぞ進みける
月の光のかげらすき
松ふく峯の朝風に
日もやうくゝにさし出ぬ
先に進みしつはものゝ
山もくづれんばかりなり
音すさまじくきこえつゝ
またゝく内につはものゝ
わたのとりでに打入りぬ
ちゝの砂をふくがごと
つるぎの光さえくゝて
もとより國の習とて
ふみてくだかん勢に

いかでえひすのまばしだに
にげよくとつたなくも
いづこの果ににげんども
あるは岩がねふみこえて
おひゆく道のはるかにも
今はおふともかひあらじ
かれの命はけふばかり
あすいかしこに又ひとつ
いさみたちたる勢に
とりでを旗に守らせて
いづこともなくにげにけん
あふげよく天照らす
朝日のみはたの旗風に
かちて勇める武夫の

支ふることのあるべきか
おのれ先にと落ちて行く
にがすべきかと諸共に
あるいくさむらおし分けて
夕日は山にかたぶきぬ
牙山の城もはや近し
今宵ばかりを授けおき
屍の山をきづかんと
えびすのまこをも恐れけん
ものゝぐあまた打すて、
内には人のかげもなし
神のみ末の國あるぞ
野山の草木もあびさふし
軍の 笛の 聲 高し

松崎大尉

雨のなごりにいと深き
むらがるあたをうち拂ひ
國と君とにつくしつる
くちせじ栲じ千代ふとも
名の萬世にのこるらむ

松崎大尉

國のひかりをまさんどて
はなぐしくもどつ國の
雨あす矢彈丸も物とせず
日本 刀の霜さむく
木の間を飛來る彈丸一つ
つらぬきとめぬ玉の緒の
きえてののちも野邊の草

西 升 子

川をわたりてますらをい
つひに命いつきぬれど
其名の代々に傳はりて
日本男兒のいさぎよき
名の残るらむ萬世に

村 松 治 作

あさ日よにはふ山ざくら
いくさの場にいでたちぬ
たゆたふ味方を勵まして
先がけせしこそ雄々しけれ
あはれや猛きものゝふも
露ときえしぞくちをしき
からくれなるにそめ出し

君がこゝろの千代八千代

陸軍大尉松崎直臣氏

あやめもわかぬぬば玉の
たどりかねたる細き道
語る聲さへひそくと
蔭に心をくばりつゝ
これをすべたる隊長は
成 歡 驛 の 清 軍 を
討ち拂はでい名譽ある
年月うけし聖恩を
忠と勇とに身をかため
一途に心をかたぶけて
清軍はやくも我兵の
かけたる橋を打くづし

よろづ代迄もかゝやかむ

鈴木政範

夜半にまぎれて行先も
いななく駒の口をはめ
あたりの森や賤が家の
進む兵士は二中队
武勇すぐれし松崎氏
呐喊一聲我手にて
先陣たりし甲斐ぞなき
返し奉らん時は今
唯大君のみためにと
安城渡へと着にけり
此處に來たるを悟りけん
中よりたちて渡らんも

空飛ぶ鳥のそれならで
されば舟にて渡らんも
身を沈めても飛入りて
さらでも深き安城渡
さかまく水の音すこく
さしもの兵士もためらひぬ
よし川水のはげしども
渡らでいかやむべきぞ
よしや水泡と消ゆども
我ひきゐつる兵士は
自らさきに進みいで
早き川瀬へ飛入りぬ
かたみに先を争ひて
みなぎる水を事とせず

翼なければ通ひえず
あたりに船の影もなし
渡る外にのすべもなし
降り續きたる五月雨に
矢よりも早く流るれば
松崎大尉これを見て
よし川底は深くども
君に捧げしこの命
いかで惜まん巳が身は
續きて入れや兵士と
玉ちる劔ぬきかざし
兵士もこれにはげまされ
乱れ飛入る二中队
浮きつ沈みつかの岸へ

渡り行こそ雄々しけれ
 またも沼田の細道を
 これに續きて中軍の
 兵士も各こゝろして
 破れし伏屋の傍より
 闇夜にそれとわかぬとも
 うちいだす筒の其の音は
 すはこそ伏兵起りたれ
 大尉は大刀を振かざし
 西に東に清軍を
 これに従ふ兵卒も
 鋒先そろへてこれも亦
 敵も味方も乱れうち
 百千の鍛工が諸共に

事なく渡りし二中队
 聲もひそく進むなり
 武田中佐がひきわたる
 渡らんとする一刹那
 不意に起りし支那の兵
 大凡數は五百人
 天に轟く雷のごと
 油斷をなすな兵卒と
 敵のあかへと驅入りぬ
 あたるに任せ斬り倒し
 我隊長を討せしと
 とさをつくりて突進む
 打ち切結ぶ其音は
 うつにも似たり大刀の音

鬼神の如く荒まはる
 さしも多くの清軍も
 攻めたてられてかきはじと
 むかへるものも一討に
 沼田も川も道のべも
 あはれ大尉はこの時に
 戦没せしぞ口惜しき
 千代萬代の後までも
 名譽を史記にとゞめおき
 たぐひまれなる軍功を

車駕親征歌

あまてるや
 月日にならぶおは御稜威
 あらぶるえびす討んとて

松崎大尉のいさほひに
 如何で此處をばせき留ん
 逃げゆくものは追討に
 秋の紅葉のそれならで
 唐紅となりけり
 敵の彈丸に打倒れ
 あはれを、しき松崎氏
 我益良雄の鑑ぞと
 天地と共に傳はらん
 たてし名譽を勇ましき

大橋文之

あふぎまつるも尊としや
 今日いでたゝす大君の

おほ御身に

太刀はさまして畏こくも
軍の營うつしまし
ちはやぶる

神代のおきてちかき世に
明らけき世にうまれ來て
みづくくる

海士ならなくにかりにだに
かけまつらむも畏こしや
おほぞらに

むらさきの雲たなびきて
すみわたる秋のそら高く
あきつ神

わが大君のみくるまの

安藝の國べにみゆきます
我もろくをすべますは

かゝるためしの有べしや
かゝる行幸を見るめこそ

賤しきわれらの言の葉に
今日いかなる日にかある

にしきの御旗かゝりきて
てらす御稜威ともろ共に

とよさかのぼる天つ日の

千代田の城をいでませり

文武の道につかへたる
装はひなしてまたがふの

あれ出ましゝに異ならず
林のひかりまばゆくも

さざりをつきていや白く
はするひづめの音たかし

岩よりかたきまごゝろに
つゞみの調べさえくして

影よりゆたにいでませり
皇太子も

ささいの宮もいでたゝす
百のつかさもいさましく
ひさかたの

あまつ御國をおりたちて
こがねの森かえるがねの
ぬきつれて

近衛のもたるやりのほの
いなゝくこまのあさ風に
きみが代は

千代に八千代と武士が
ならず笛の音いとたへに
そこふかき

み池のみづもひくくらむ
道をまもれるものゝふの
見わたせば

さしの草木もあびくなり
つるぎもなりて聞ゆなり

さしもにひろき芝生には
つとひし人のみちくして
うち日さす

今日の行幸ををがまむと
蟻のはふべきみちもなし

みやこの大路どころせく
今朝のふく風きよくして
さくら田の

おし立てし旗もおびたし
そゝろに靡くも心地よや

花のにはひよよろづ代に
みほりの松ともろとも
もろびとの

とつ國までもかをりゆけ
千代田の宮のながれと

ひどしく唱ふるこゑく
かへすこだまも萬代と

はるかにひききて天地の
今日の行幸をおくるらむ

やすみし、

わが大君のおほみゆき
あはれ尊ときおほ御身に
かしこくも

をろがむだにも畏こきを
賤しきわれらを見かへりて

いやしき吾等のほぎ言を
ますら健男もいかばかり
あめつゆの

うけまし、こそ嬉しけれ
たぎつあみだに咽ぶらむ

つねのめぐみの深きだに
少女子ならわれもまた
はるかにも

ひがたき袖のあるものを
思ひのまゝに泣きてまし

聞けから國のわが兵士
近きうしろにましますぞ
からくにの

わが大君のいましらの
猛きいましのうちむかふ

大同江のあなたに

えびすの國のいくさびと

雲のごとくによせぬどか
しまやしま
仁義のいくさむかひなバ
皆ちりぐにになりぬらん

平壤の戦

大同江のひろければ
うちわたりつゝ進みけり
平壤の城はかたけれど
うちみだれつゝ入にけり
大同江のかの兵の
うしろに城をひかへつゝ
平壤の城はかの兵の
まへには川をよこたへて
大同江も平壤も

かすみの如くよせぬども
秋の木の葉ともろどもに
つとめよみくのにの武士よ

またゝくひまに武夫の
まもりやなかりし彼岸に
またゝくひまに武夫の
まもりやあかりし彼内に
たのみにたのみし處なり
まら浪たかくそこふかし
たのみにたのみし處なり
いしずるかたくむね高し
あどか守備のあかるべき

たぐひすくなき山かはの
もしわが兵のまかばかり
ひとつの舟のふせぎなバ
一人のをのこまもりなバ
かくも得がたきこの川に
かの清兵のおほづゝを
かの清兵はつるぎ太刀
わが武夫のかくてこそ
それといはねどもろ共に
ころしも秋のもなかにて
ことによひは望の夜の
まら浪たかくうちよする
おして渡れるいさましさ
底のみづちもかくらむ

いくさの場によきどころ
よき要害を占めなして
百のいくさもこえわびむ
百のつはもの入りわびむ
かくもよろしきこの城に
そなへてまちきわが兵を
どぎてぞまちきわが兵を
打むかふにもはえわれど
いさみくゝてすゝみゆく
風ひやゝかにふきわたる
月毛のこまにむちうちて
大同江をひともみに
浪もきしべににげぬらむ
うち出す銃のひまもなく

かざすつるぎの束の間に
 修羅のちまたに成にけり
 飛ぶ炎のあられかも
 くるさけぶりのたゞ中に
 死してはえある武夫の
 夜もやうしく、に白みつゝ
 たちまちひくどきの聲
 かねて期したるわが兵は
 城のそともをかこみつゝ
 攻めたてたりし物すこさ
 平壤の城かたしども
 かの清兵のおほしども
 そら飛ぶ鳥のそれならで
 かれの生死のきはみなり

すみつる月のかげきえて
 降るや血まほの雨ならむ
 あやめもわかぬぬば玉の
 うちあふ太刀の音すなり
 いかにきをひて進みけむ
 空のひかりもわけむとす
 四方におこるともろ共に
 ひがしに西にみんなみに
 朝日のみはたおしたてゝ
 水のもるべきひまもなし
 いかでかいかで支ふべき
 いかでかいかで敵ふべき
 いまのがれむ道もあし
 敵のちからのつきにけり

みかたの勇氣いやましぬ
 のこりすくなに打ころし
 そのほか士卒かす知らず
 城壁高くかゝげつる
 さすや朝日のひかりに
 大同江のやぶれたり
 かれの弱さにあらずして
 あはれみくくの武夫よ
 城のあとなくなりぬども
 いさをは世々に傳はらむ

兄弟の兵士

かけ行く靴の音も絶え
 筒のけぶりは空になほ
 斥候ひとりたどり行く

多勢にはこりし清兵を
 まろの大將はじめとし
 おのもくゝにいけどりて
 わが日の本のはたゑるし
 かの黄龍もふしぬべし
 平壤の城はおちにけり
 われの強きによるならむ
 いましの勝ちし平壤の
 大同江はあせぬども
 ほまれば世々に殘るらむ

小花 貞三

喇叭の聲も止みたれど
 のこりて月のかげくらし
 道のかたへにうごめくは

敵かみかたかいぶかしと
味方の手負と知れたれば
聲きゝつけてあに君と
弟なるかと飛び下りて
胸のあたりも血にそみて
何いともあれ病院へ
ことをも聞かでおとうとい
勝利もくゝ大勝利
聞くより手負もほゝゑみて
負てゆかんとうながせば
草の上にて死すること
望いかなふ今の今
兄君のみい凱旋の
我事をもし母君の

駒をとめて見すかしぬ』
傷はいかにと呼びかけし
手負いくるしき聲あげぬ』
肩にすがればかたさきも
早絶えんとすいきのをも』
早くくゝといふ兄の
勝敗いかにとひかけぬ』
敵い大方くだりぬと
萬々歳とくどもりぬ』
くるしき息をつきながら
我年頃ののぞみなれ』
今またのぞむ望あり
歌うたひつゝかへられよ』
とひ給ひあべ國のため

このほまれある戦場に
いひをはりつゝ事されぬ
くさむら毎にちく蟲と

平壤の捷歌

我 日本 の 軍隊 は
北へ北へと向ひつゝ
一日のほごに乗取て
やがてぞ入らむ奉天府
要害 堅固の平壤も
唯一戦に落にけり
海洋 島の海戦に
残りしものは二三艘
あたの船

いのちすてつとかたりてよ』
折しも耳にきこゆるは
大同 江の水の音』

朝日重光

九月十日の頃よりぞ
山なす敵の平壤を
なほも北へと進みゆく
やがてぞ取らむ北京城
四方を圍みて攻ければ
祝へや陸の勝いくさ
あるは沈めつある焼き
祝へや海の勝いくさ
岡 麓

鈴木政範

つゝめるかねの厚けれど
わが日のもとの益良雄が

劍の光

豊さかのぼる日本の
大君のため君のため
進みて入るも國のため
命をしまぬものゝふの

大勝利

今かへりぬとそともより
手に何やらんたづさへて
つくゑの前にはしり來ぬ
この繪を買ひて給はりぬ
見たまへへゝゝあにさまよ
これゝゝ日本の兵隊は

まごゝろうすきわたの船
たゝ一うちにまづめけり

關根喜睦

つるぎの光かゝやかし
海山こえて敵の中
つきて敗るも君の爲
戦ふさまこそをしけれ

大塚楠緒子

あしおとたかく聲をあげ
男の子はいとも嬉しげに
『あに様見たまへはゝ君の
ほしとねがひし繪草紙を
日本と支那の戦争ぞ
支那の兵士を追ひてゆく

此處にて一つかしこにも
むくる並びてこゝちよや
皆いさましくたゞかへり
毛をひかれつゝ支那兵の
見たまへへゝゝあにさまよ
腰をぬかしてたふれたり
『これ見よこゝに地雷火の
これぞ松崎大尉ある
あないさましき大將よ
弟よあすのちゝ君も
『なにちゝ君もゆきますか
ひきて抜きてん豚の尾を』
昨夜よ廊下のくらがり
『あにさま兄様のたまふな

ふたつ三つ四つ支那兵の
うれし日本の兵隊は
見たまへへゝゝあにさまよ
をかしき顔して叫ぶなり
彈丸にうたれていま一人
あなおもしろの戦争や』
ものすさまじく破裂をす
かたなを振りて進むさま
支那にいかゝる人をなき
朝鮮さして立ちたまふ』
僕もゆきたやもるともに
『口にのいへとおとうとよ
泣きし誰ぞ』と打ゑめば
昨夜のみ僕にやわかりき

つゆ去らぬまに兄さまの
くらきすみより聲たてゝ
驚ろかさされて泣きつれど
いつもお庭でもとちと
負けしためしいなき物を
次郎さん太郎さん誘來て
僕ハ 太閤秀吉ぞ
つよき去るしの御褒美に
たまへかし』とて聲あげて
號外うりのこゑたかし
あはれ日本大勝利
赤きこゝろをあらはして
風になびくもこゝちよや

形見の衣

白きこゝろもをうちかづき
出でたまひしに思はずも
まことハ僕ハよわからず
いくさごとして遊ぶとき
思ひいだしぬそのいくさ
いざや初めんおもしろや
あにさま僕がかちたらば
その鉛筆をたまへかし
又はしりゆく外のかたに
あはれ日本大勝利
君をことほぐくにたみの
門にかゝぐる日のみはた
風にゆらぐもいさましや

母のかたへにあそぶ子は
たれの衣』とうちとへば
寒ささびしき國なれば
きのふの文にありしより
つよきいましの父君は
かちましにきと聞くものを
わが國民にあふがれて
その父君のゆめをみて
詞きゝいれをさな子の
あとにいよくいそしみて
野路に山路にふみわけて
たゞかひまささんこの衣
ねよどの鐘ハひゞけども
猶もぬふなりさまぐくの

『今ぬひたまふその衣
『この父君のきますなり
わたあつく去て送れよと
心こめつゝいそぐなり
あたのとりでを打やぶり
やがていみじき名を擧て
歸りきさまさんいさましく
とく眠れよ』とたらちねの
ふしどに入りぬ嬉しげに
雪ふりこほるとつ國の
み國のためにはわが夫の
とく縫はましと急ぐなり
月の光ハふけゆけど
望をいとに結びつゝ

こよひもむかふ燈の
ぬひし衣を手にとりて
『朝鮮にます父ぎみに
あたゝけしとや着給はん』
答へぬ母のかほみつゝ
『なと泣給ふ母君の
なと今宵しも泣給ふ』
わが子のおもわまもりつゝ
をりしも夜風あらゝかに
燈火はたと打きえて
玄のびねになく其聲は

幼なき兵士

若葉 玄げれる下蔭に

影常ならず物さひし
いとけなき子は又どひぬ
とく送りませこの衣
手まさぐりつゝ喜こべど
おつる涙をいぶかりて
ぬひをへましゝ今宵しも
母のいらへもなさずして
又もなみだにむせぶなり
まとの隙より吹き入れバ
床のを琴の緒のきれぬ
あやなき暗にもゑるくして

藤 島 雪 子

兄と弟のふたりづれ

木もてつくれるあら駒に
ゑぼしかぶれる弟を
『われらふたりうちゝ君の
海山へだつる朝鮮に
力のかぎりたゝかひて
人にすぐれしいさをたて
とつ國びとにゑらしめん
弟の聲もいさましく
わが名のますらを桃太郎
敵いくまん騎よせ來ども
われうちゝらし平らげて
あまたの従者どもなひて
『げにゝいましのいふ如く
父君かねてのたまひき

二人ひとしくうちのりて
かへりみちがら兄のいふ
みゆるしうけて今日よりの
み國のはたをひるがへし
こまもろこしも何のその
日本をのこのをゝしさを
おくれすすゝめ弟よ』
『われのすぐれしつはものよ
けはしき道をよしやよし
いかでおそれんひとうちに
多くのたから舟にのせ
ほまれおひつゝかへり來ん』
わが名も今の清正と
その父君は軍人

いざなひつれてゆきましき
 おく山ふかくふみのぼり
 われこのやりを打ふるひ
 いけどり來りて我庭に
 『あなおもしろやさらばまた
 高麗ものがたり語らせて
 二人のともにいさみたち
 いまやおそしと待ゐたり
 『いましは弓を持つととも
 矢なくば更にかひあらじ
 『いなく兄ぎみ矢はなくも
 つるぎ引ぬきさくらんのみ
 われの思ひぬ兄ぎみよ
 けさしもわれの父君の

われかの國にいたりなば
 みちなき道もわけいりて
 野にふす虎も狼も
 はなちおきつゝながめてん』
 われのつれこしをのこらに
 ともに遊ばんおもしろや』
 はせおくれたるつはものを
 駒のたてがみなでながら
 わたもし近く打かこみ
 いかにも思ふぞおとらとよ』
 もし弓ゆかずば此こしの
 さても兄ぎみさゝ給へ
 わが父君のいとつよし
 つるぎを取りて持ちつるに

ながきが上にいとおもく
 げに父君の國びどの
 『あな弱きこといふものよ
 あたにむかはん今更に
 先にゆかん』とすゝみゆく
 われのをのこぞますらをぞ
 兄のたもとをひかへつゝ
 折からかなたの木かげより
 たてたる旗のひらくと
 まだいとけなき兵士つはものの
 ともに喜びちかよりて
 いざくたゝんとくゆかん
 手綱かいどり先にたつ
 こまに鞭うち人々に

たへがたかりき兄ぎみよ
 中にもすぐれしつはものよ』
 さばかり弱きにかにして
 いましつれじわれひとり
 『つれてよつれて兄ぎみよ
 つれてよつれて弟も』
 聲のかぎりによびさけぶ
 喇叭の聲を先立てゝ
 風になびくもいさましく
 十人ばかり來たりけり
 『時おくれていあしからん
 弟もこよ』とくるこまの
 兄につゞきて弟も
 おくれじとこそいさむなれ

いざとばかりにおのがじ、
うたひいでたる歌こそい
木だまにひきつたはりて

明日の戦

故郷の山を跡に見て
こゝにかしこに艦をどめ
こゝの海べにとまりて
日ごとにかはる事あき
とくはじまりて敵艦を
はやる心を艦の中に
けさの嬉しや待わびし
明日のいよ／＼おしよせて
水夫も火夫もいさみたち
よるこび溢れて心なく

つるぎぬきつれ聲高く
日本男兒のいくさ歌
聲いさましく聞ゆなり

大海原のなみのうへ
はや幾日をか経たりけむ
すでに三日四日過にけり
とく戦のれこれかし
残る方かく碎かんと
まひてまづめて二日三日
戦の令下りつゝ
たゝかひてんと聞くよりも
おのがつとめをつくしつゝ
寄する波をも驚かす

はや夕ぐれになりぬれば
夕けのむしろも賑はしく
もどにつとひておのがじ、
歌ふもあれバ舞ふもあり
其人々の一むれを
こがねのすぢも多かれど
かたへの柱に身をよせて
おもて射させてかすかにも
小さき手帳をとりいだし
『いもどのおくりし此歌を
よくつとめよ』とひとりごち
『われも一人の軍びど
國と君どにかねてより
家をもすてつ病ませる

ともしびの數ましそひて
最も大なるはばしらの
軍の樂を奏すなり
かたみに明日を祝ふめり
少しはなれて服きよく
年まだわかき士官あり
みそらに清くすむ月に
うたふは何の歌ならむ
まばしいそこを打ながめ
よむも今夜ぞはてならむ
筆はしらせてゑるせるの
み國につくす軍びど
さゝげし命を捨んとて
母君にさへ別れきつ

さかまく波も何ならず
 身は軍びとわれらに
 敵打くだくたゝかひを
 待まうけたる戦の
 我ひきゐるをる兵士らよ
 み空にすめる月影を
 底又底と限あき
 我日本の光をば
 思へば心いさみたち
 さりさりながら明らけき
 共にてらすかなつかしや
 鳥のあれども一ひらの
 思ひいづれば母君の
 草葉の陰の父君に

すさぶ嵐も何ならず
 國と君との其ほかに
 願ふより外ねがひなし
 早くも明日と成にけり
 力のかぎり戦ひて
 同じ海にて明日の夜の
 ふしとの内に共に見む
 あらはす時の來れりと
 肉もふるひぬ血もわきぬ
 月の光のふるさとも
 空を仰ぎて稀に見る
 音信よせし事もなし
 病ましながらいさぎよく
 告げまつるべき功たて

歸るにあらずば此母の
 御詞今も身にぞまむ
 わが母君よわが上の
 やよ吾妻よいもうとよ
 ゆめ見苦しきふるまひを
 たへがたくとも吾つまぞ
 われにかはりて母君に
 又我子をば我と思ひ
 すぐれしものとなし出よ
 かたりきかせよ吾ことを
 力のかぎり戦ひて
 あな思はじよしやよし
 いかにも思ふも此おもひ
 見るといふしに見る月も

子にあらじとのたまひし
 我のふるひてすむべし
 御心やすくおぼしてよ
 われ死すともかきしびて
 なす事なかれよしやよし
 吾いもうとぞどもくくに
 仕ふるつとめつくせかし
 心あはせてもりそだて
 ひとゝなりなば父の事
 此ほまれある戦に
 功残さん我上を
 いかにいふともこの心
 つきなん時のあるべしや
 きくといふしにきく波も

われを泣かすか堪がたや
かくも女々しきかこち言
かくかきまゐるしきりどりて
下に行しがまばしゝて
先の憂の今に早
あまたのむれの中に入り
ふしおもしろく人よりも
まちまうけぬといひ顔に
夜ひますくゝにふけゆきて
樂の調べも波の音も

秋夜

夜寒のかせの身にしみて
思ひかへしておもへども
けはしきところ振取りて

あはれやさしや堪かねて
月よ聞しかゆるせかし
封じこめつゝ立あがり
又甲板にのぼりきぬ
ぬぐひし如く打きえて
うたひ出たり樂しげに
すぐれてをかしき其聲を
さく人皆の拍手うてり
月のいよゝゝかげすみて
清くぞひゞく艦の上

島田隆子

そどもの虫のこゑかちし
浮ぶのいつもをみだなり
ほまれえますときさく毎に

ましつるとききをまづ思ふ
太刀にすがりて珍らしき
子らのさま見し其つらさ
人もありぬときくものを
いでや忘れむそのかみは
憂世のうさひますととも
いつか歸りて來ますぞと
きゝかますらむその聲を

こよひの月

火筒の煙をさまりて
月影しろくきらめけり
どりてのり越え雲ふかき
けふの大同の流をバ
城を事なく打ぬきつ

いとまこひえてましゝ時
衣うちなでゝよろこびし
渡わたすとまづみつる
われのみならじ悲しさは
あはれ思はじかのことい
いくさのたより烈しども
心もまらで子らの問ふ
草葉のかげにこよひしも

重なるかばねの上にしも
あはれきのふの成歡の
牙山のまもり攻ぬきぬ
打渡りつゝ平壤の
あすの義州のおひ攻に

ほふりつくさんえみしらを
 渤海の波ものならず
 心のつるぎ太刀のあぢ
 破らでおかじ奉天府
 我大君のかしこくも
 大御かりやにいますとよ
 こよひの月にはるかなる
 祈りますらん我上を
 譽のえるし身におひて
 さらずの敵の彈丸の
 大和をの子の名を立てん
 み空見上る折しもあれ
 玉の響のきこえつゝ

森の木陰

韓山おろし何かあらむ
 大和をのこのどぎすます
 如何に守りの強しども
 かこまでやまじ北京城
 陸地はるかに進みまし
 我故郷のちゝはゝも
 こなたながめて如何ばかり
 天もし我を運をかさバ
 嬉しく歸らん故郷に
 中にたふれていさぎよき
 あはれさやけき此月と
 森のあなたに二の三つ
 ふくろふの聲物すとし

佐々木昌綱

み空はるかに月すみて
 さ夜ふけ渡る秋風に
 かゝり火の影薄らぎて
 ながれに近きもり陰に
 銃うちかづきまづくと
 痛む足もとふみしめて
 まばしやすらふ程もなく
 月の光にすかしみて
 弟ならずや兄ぎみか
 今日勝利をことほぎて
 語りかたられもろ共に
 かたらふ程も兄いたゞ
 いづる血潮に弟の
 驚きとへバ打きすよ

流るゝ水のおとさきよく
 かなたこなたの陣營の
 虫の聲のみさやかに
 そへる小道をたゞ一人
 歩みきたれる兵士あり
 木陰にやをら身をよせぬ
 彼方より來しわか者の
 いましの誰ぞ其こゑの
 手をとりかはし兄弟の
 かたみにたてしいさをしを
 つゝがもあきを喜びて
 もゝのあたりをさするなり
 兄君如何にかえたまひし
 さのみ烈しく痛ますと

弟の心いためじと
ふけゆくまゝにいとしく
見よや弟かの月を
いましも忘れじ去年の秋
舟を浮べてもろどもに
今宵の遠きから國の
思へ弟ふるさとの
家へのこれる妹が
五郎もどもに打よりて
如何にかながめ給ふらん
父母さての弟妹も
戀しからぬにあらねども
わが國民のつとめなり
向ふ敵をバ打はらひ

かたる心よ如何ならん
すむ月影を仰ぎ見て
けふの長月十三夜
父母どもにかの川に
樂しとめでし月影を
風さえ渡るこの野べに
わが父母の今宵しも
南にむきしかの窓に
竹の葉分にこの月を
弟もえばし見つめつゝ
年へてなれし故郷も
御國のためは戦ふの
ますらたけをのつとめなり
軍の庭に見る月の

去年にもましてさやけしや
もとの小銃を兄弟の
東の方に三つ二つ
時おくれと急ぐなり
つゝの音こそ聞ゆかれ
手負し兄や如何ならん
月はいよゝゝさえ渡り
進め進めとふきあらず

征清の歌

風なき池をさわがせて
まげれる梢を動かして
故もなくしてかりそめに
故もあくして徒に
同じ東の洋にたち

夜もふけぬらんいざと
打かづきつゝ諸共に
みゆるかゝりをめざしつゝ
折しもかなたの森中に
大刀打かはす音すなり
いさめる弟や如何ならん
流るゝ水の音たかく
喇叭の聲ぞまきるなる

佐々木信綱

いかでか波を立たせんや
いかで木葉をちらさんや
我の争を求めんや
我の戦を好まんや
同じ亞細亞の中にすみ

隣どちなる清國と

戦ふのそも何ゆゑぞ

多くの屍あまたの血
巨多の歎を報酬にて
いくその罪なき兵士を
たふれしむるの何の爲
大海原のおくづきに
海にくぬがに戦の
百千の魂は世をぞ去る
尊とき報酬を與へつゝ

夫あき妻子なき父
さて戦のおこるなり
雨あす彈丸の其下に
いくその罪なき兵士を
沈めしむるの何の爲
おこるすあはち一度に
あはれ思へばかくばかり
戦ふのそも何故ぞ

千代とことばに變りあき
すめらみことを戴きて
清く正しきましまの

天つ日嗣をうけませる
朝日に匂ふ山ざくら
日本の國の國民が

國につくせる益良雄の
むつびかはし、隣國と

尊とき血を報酬にし
戦ふのそも何故ぞ

年經てなやみし身の内の
道に旅人やみふせり
二人の人のあはれなる
あはれびふかく情ある
『あないとはしの旅人よ
内の病のせめぎ來て
まだ生の緒の絶ぬまに
情を知らず驕りたる
『此旅人のわが下僕
道のかたへに倒るども
おどれる一人のかくいひて

いたづきとみに起りつゝ
其旅人のとなりなる
此旅人を見いでたり
一人のかくぞいひ出し
もし此まゝに捨おかは
明日の命もはかられじ
力あはせて助けばや』
一人のかくぞ答へにき
よしや病のおもりつゝ
いましの力をかりせじ』
あはれぶ一人を打笑ひ

下僕しもべにあらぬ旅人を
 苦しみなやむ其様を
 一人は遂に見かねつゝ
 此あはれなる旅人を
 かくて二人の中らひに
 あはれ正しき道理ことわりは

おのが下僕しもべといひなして
 よそに見つゝもうそぶけり
 『さらば助けんわれ一人
 いで救ひてん一人にて』
 争ひしもおこりにき
 いづれの方にあるならむ

同じ亞細亞の家のうち
 さゝふる力つきはてゝ
 家の平和のくづるべき
 かれ清國とわが國の
 よしや衰るへ小さきも
 おごりはこれる清國は
 我あはれびて助くるを

よしや小さき柱だに
 倒るゝ時は亞細亞てふ
 基とやがてありぬべし
 中にたちたる朝鮮は
 獨だちたる國なるを
 その屬邦といひなして
 さゝへ拒める禮みやなさ

この争ひはじまれり
 かれの非望を遂げんとて
 われの厚意にむくゆるに
 誰しの人かさても猶

かくて戦はじまれり
 われの權利をおかしつゝ
 かれは耻辱を與へにき
 忍び得べきぞ無禮みやぢさを

朝日うらゝにさし昇り
 されども支那てふ老人おおいひとは
 世界にあまねき文明の
 されども支那てふ老人は
 このあはれなる老人は
 其身病におかされて
 かくては程もあらずして
 病は其身をおかしつゝ
 昔のさかえ夢みつゝ

東の空のまらみたり
 いまだ眠のさめぬなり
 光は窓にさしいれり
 いまだ臥床ふしどの内うちにあり
 迷と傲慢おごりの夢さめず
 常に夢路をさまよへり
 眠の内うちに身みはてむ
 其苦しみに身みはてむ
 いまだ眠れる老人の

ねぶりさまして今の中に
救ふは若きますらをが
おどりの夢のさめやらぬ
神の御するの國民が

身をおかせるいたづきを
まさになすべき天職なり
隣の國を導くは
まさにさすべき天職なり

御國につくす大丈夫の
われ清國とたゞかふの
誠の道をふみてなり
尊とき血をは犠牲にして
いまだ開けぬかの國を
わが東洋の平和をば

尊き血をば流しつゝ
正しき道をふみてあり
ふむべき道をふみてなり
われ清國と戦ふは
わが文明に導きて
永く久しくたもつ爲

高麗のはり原ふみ分て
あら波ままく艦の上

いさゝく駒にむちを上げ
逃げゆくあたを追うちて

我ますらはは清國の
我つはものは清國の
東の洋にさしのぼる
野山の草木靡きふし
海に陸にたゞかへば
むかふ處にあたもなく
谷にひゞきて聞ゆなり
戦ふごどにみいくさの

頼めるとりてを敗りたり
頼める艦を沈めたり
朝日の旗の旗風に
八重のうしは路龍ひそむ
すなはちかちて皇師の
うたふ凱歌いさましく
浪にひゞきて聞ゆあり
かならず勝つは何故ぞ

我天皇のかしこくも
つくす辛勞おぼしつゝ
大御心の廣島へ
昔齋明の天皇が
心づくしにいでませる

海をわたりてつはものゝ
御代長月のもちの日に
大御車を進めまし
百濟の亂すくはんど
木の丸殿のそれからで

せばき假屋に朝な夕な
 我^み皇后^みのかしこくも
 纏^きひつくべき縋^ぬ帯をしも
 我國民のおしなべて
 貧しき民にいたるまで
 あるの夜すがらわらぐつを
 あるのひねもす機^{はた}おりて
 後の^{のち}備^{そなへ}の兵^{つは}員^{もの}の
 耕へしゐつる賤のを
 漁どりゐつる海士人の
 み國の爲に死せん事
 きそひ進みていでたつに
 死せよ吾子と打ゑめば
 涙のみつゝ國のため

軍旅^{いくさ}の事を続べませり
 負傷^{いたづき}おへるますらをが
 大御手^{きみ}づから作ります
 王^{きみ}の愾^{うらみ}に敵^{むく}いんと
 軍^きの資^{しろ}を献^{たてまつ}り
 作り出つゝさゝぐちあり
 得たるこがねをさゝぐなり
 召集^{めし}の令^{おほせ}を待得つゝ
 くはをば畑になげすてゝ
 あみをば磯にうちおきて
 み國の民の望ぞと
 父の門出をはげまして
 妻の吾夫^せを見おくりて
 つくしませよと祈るなり

いとけなき子の我父の
 よき土産^{つと}もちて歸りてと
 内にいかゝる君ませり

軍^きの服^{きぬ}のをしさに
 帽子^{ぼうし}ふりつゝいさむなり
 内にいかゝる御民あり

三千年來やしなへる
 時來りぬと勇みたち
 けはしき路も事とせず
 いさみ進みてつはもの
 彈丸^{たまご}にあたりて玉の緒の
 進め進めのふえの音を
 するとき壁をよちのぼり
 門を開きてみいくきを
 たまの霰^{あられ}とふりくれと
 我の死なむと一步だに

日本魂世に示す
 將士の心をあはせつゝ
 とぼしき兵糧^{かて}も事とせず
 家をも身をも忘るなり
 今かたえんとするまでも
 猶たゝざりし喇叭卒
 敵の守りのかたかりし
 導きいれし兵士あり
 わが聯隊の旗のもとに
 退かざりし將もあり

くだけし弾丸に火の起り
猶わが艦のほのほをバ
敵の旗艦と戦ひて
猶我艦を進めつゝ
外にいかゝる將士あり

其身も黒くこげたれど
消しどめたりし水夫あり
ほばしら敗れさづつけど
命すてつる艦長もあり
外にいかゝる勇士あり

君のみことをかしてみて
義勇にあつき國民が
一つ心につくしてぞ
まかゝあれどもいかに
將士ひとしくつとむども
我の仁義のいくさなり
義の爲戦ふみいくさなり
いとあはれなる朝鮮の

義勇にとめる軍隊と
内外心をあはせつゝ
我みいくさの勝にける
内外心をあはすども
名なき師の勝ちがたし
義の爲戦ふいくさあり
天の祐くる師なり
獨立をしも助けんと

義の爲戦ふいくさなり
遠く久しくたもたんと
ひらけぬ國を文明に
義の爲戦ふ皇師の
われの仁義の師なり

わが東洋の平和をバ
義の爲戦ふいくさなり
すゝめ導くいくさなり
天のたすくるいくさなり
神のたすくる師なり

全国の歌人たちよ征清の事につきたる作あらば長歌にまれ短歌にまれ
今様にまれとく我方にわくりてよ續編を撰ばん折にのすべければなり

編者 識

征 清 歌 集 終

明治廿七年十月廿六日印刷
明治廿七年十月廿九日發行

定價金拾錢

撰者 佐々木信綱

發行者 大橋新太郎

日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 平島曠

日本橋區上槇町十六番地

印刷所 八重洲橋活版所

日本橋區上槇町十六番地

東京日本橋區本町三丁目

發兌元博文館

版權
所有

從二位伯爵東久世通禧公題歌
從三位細川潤次郎君題字

佐々木信綱先生新作

(第九版)

支那征伐の歌

附錄討 清 軍 歌

全一冊洋裝
正價七錢
郵稅二錢

今や日清兵を交へ妖雲韓山をどざす時にあたり。歌仙名匠少なからずと雖も。一人の歌人だも大に之を歌ふものなきこと實に慨歎の至に堪ず。こゝに年少の歌人佐々木氏が滿腔の熱血眞誠の愛國心凝つて一「支那征伐の歌」となれ。日章旗の歌、進軍の歌、義勇兵の歌、吾日本の歌、凱旋門の歌の五篇各熱血をそゝぐの聲あり歌人の聲は時として彈丸よりも鋭どく時として劍銃よりも力を有す。憂國の士勇壯の兒童幸に一部を購求して年少歌人が憂國の聲を聞け

宮中顧問官學習院長田中光顯君題辭
學習院音樂教官納所辨次郎君
高等師範學校音樂教授鈴木米太郎君 合著

明治軍歌

全一冊洋裝
大判曲譜入
正價拾二錢
郵稅四錢

本書目次

- 君ヶ代 ● 皇統 ● 日本男兒 ● 行軍 ● 旭旗 ● 歩兵 ● 大和心 ● 水
- 兵 ● 喇叭の響 ● 清正 ● 大和魂 ● 日本刀 ● 東洋の光り ● 凱陣 ●
- 此戦ひ ● 鷹てや懲せや ● 抜刀隊 ● 連戦連勝 ● 哨兵 ● 君の御稜
- 威 ● 御國の民 ● 進撃 ● 軍旗 ● 行け行け日本男兒 ● 國旗 ● 軍艦
- 龍の旗 ● 火砲の雷 ● 招魂社 ● 大皇國

本書に掲げる所の軍歌は皆是當代名家の作之に合するに符曲を以てす
忽にして萬馬嘶き忽にして千山崩る劍光目に映し彈丸雨の如し謠へ
や謠へ日本男兒の勃鬱せる敵愾は支那四百餘州風雲を吞吐する迄謠
へ

陸軍大佐從四位勳三等高島信茂公題辭
東京音樂學校教授從七位上眞行君校閱
學習院音樂教官納所辨次郎君編

(第二版)

日本軍歌

全一冊洋裝
大判曲譜入
正價拾二錢
郵稅二錢

本書は多年職を學習院音樂教官に奉し盛名噴々たる納所氏か、文學
諸大家の製歌と音樂諸名家の作曲とを輯纂し、加ふるに正確なる曲
譜を以てしたるもの、若し一度樂器に和して吟詠せば、英氣勃々、
銀鞍檄を草し壯心劍を横ふるの慨あらん、**呼少年男子が百戰**
報國、一死殉難の志氣實に本書にあり、世の軍人活少年は
踴躍して本書を歓迎すべし

從二位伯爵東久世通禧公題詠 佐々木信綱君編

繪入幼年唱歌

全一冊和裝
日本紙密刷
正價拾二錢
郵稅二錢

唱歌の人心感化せしむる、其力最も大なり。本書は歌人の名世に高き佐々木先生自作の唱歌、及諸氏の作數百篇を聚められ、殊に桂舟永洗兩氏の密畫數十個を挿入せり。幼年諸君に忠君愛國の思想を増さしめ、優美高尚の觀念を養はしむるには此書に勝るものなかるべし、可憐の幼年子女諸君よ、必ず一本をあがみ、坐右の友として朝夕愛讀せられんとを

山田美妙齋君著 渡邊省亭久保田米僊二氏密畫

新調青年唱歌集

全二冊雅裝
正價拾二錢
郵稅各四錢

美妙齋君の唱歌韻文は格調の奇抜にして閑雅流麗なる識者之を知る殊に本集は青年の爲めに尤も其熱血多情の筆を揮はれたり歴史情事春夏秋冬祭日等皆載せて光彩を發せり

大和田建樹先生著 (尋常高等共文部省檢定済)

尋常帝國唱歌

全二冊和裝
正價一冊七錢
郵稅二錢

次目 (上卷) ● 始業の歌 ● 好き家 ● 鯉と龜 ● 朝の歌 ● 田植の歌 ● 國民 ● 親の恩 ● 神風 ● 小蝶 ● はぜつり ● 食しき人 ● 今こそ ● 旅の空 ● ドドド ● 終業の歌 (下卷) ● 八咫 ● 鳥 ● 日本武尊 ● 富士の高嶺 ● 元旦の歌 ● 時計 ● 皇后の祭 ● 宮の山 ● 謡へよ波 ● 高津の宮 ● 運動會 ● 今日から休 ● 源平 ● 夕霜 ● 湊川 ● にひなめ

高等帝國唱歌

全二冊和裝
正價一冊拾二錢
郵稅二錢

次目 (上卷) ● 春の歌 ● 如意輪堂 ● 月と我と ● 湯氣の水 ● ぼたる ● 時は翼 ● 夕の雲 ● 閣龍 ● 妹の名 ● 池の蛙 ● 秋は來たり ● 水蒸氣 ● 農家 ● 希望 ● すみれ ● 管公 ● 樂しき ● 時 ● 母の心 ● 夜あけ ● 採集の歌 ● 鍛冶の歌 ● 兒 ● 夕暮 ● 君恩 ● 竹馬 (下卷) ● 三種の神 ● 器 ● 夢 ● 和氣清麿 ● 自然の音楽 ● 忍耐 ● 子 ● 嵐山 ● 雛の雀 ● 二月十一日 ● 車 ● くる ● 草 ● 千鳥の聲 ● 蟻の子 ● 伊勢の宮 ● 居 ● 夕立つ ● 雨 ● 祝日 ● 石橋山 ● 老木の陰 ● 水の草 ● 工女の歌 ● 學校の道 ● 水の歌 ● 大和田先生の歌 ● 附するに ● 和洋諸大家の作 ● 此二書は兼て唱歌作者として老練の名ある ● 趣味多く、譜は簡潔流調にして、尤も兒女を喜ばしむべし。歌には一々傍假名を附け、間には細畫を挟みて餘情を示せり。

森鷗外。森田思軒。德富蘇峯。幸田露伴四君序跋
梅花道人中西幹男君著

新躰梅花詩集

全一冊洋裝
正價拾五錢
郵稅四錢

目次●九十九の廻●滴々露●靜御前●毒湛禪師を辭し虎溪山を出る●松壽軒西鶴の
畫像に賛する●黒川白鷗の詞四首●對空吟●戲に露伴子と韻を探りし折柄已アエ
の兩列を得し●は二首●江戸紫に題す●春の舍主人●竹の舍主人三首●鷗外漁史●古蒼
樓主人●靈魂●出放題●旅鳥●須磨の月夜●季香蓮の菩薩蠻の意を譯す●同しく柳永が
卜算子慢を●原作者の名を失す二首●米僊子の西京に行れしと聞き想鳴河納涼に走せて
浦の苦屋
氏が得意の新躰詩即ち韻文の巧妙は世間既に定評あり明治新天地の新字を味はんとする
諸君は乞ふ之を讀め
大和田建樹先生註釋

祝祭日唱歌註釋

全一冊洋裝
正價六錢
郵稅二錢

口には「君が代は」歌へど、其意味の何たるをば、十分に解し得ざる人あり、何となれば
其詞が古言なればなり、註釋の必要此に於て起る、其意味を知りて歌ふと、知らずして
歌ふ、其興味果して如何ぞや、此に於て註釋を讀む事の必要ます、追ふ。此書は必
要に因て成り、其必要の衝路に立たる、教員生徒諸君の購讀を待ちつゝ有るものなり

繪畫主任 武内桂舟君 編纂主任 江見水蔭君

征清畫談

每月一回發兌密書挿入
定價 一冊(百頁)金八
錢●六冊前金四
十五錢●拾貳冊前金八拾
五錢●一冊郵稅一錢五厘

每卷に小川一眞氏製版の寫眞彫刻銅版畫を口繪とす
征清の大戦は振古未曾有の大盛事にして、尤有爲なる我が日本帝國、國民の實力を宇内に發
揚するものなり、吾たに我が史上千秋の大壯觀たるのみならず、又實に世界歴史上一の大光
輝たるべし、之を傳ふる獨り千古の大史筆。大妙文を要するのみならず、更に壯快妙絶の思
畫を以て、中外の老幼にも、身自から陣頭に立て、萬馬奔騰、勇士酣戰の實況を目撃するの思
ひあらしめば、其の補益必らず少からず、此征清畫談は、畫壇の雄將として、殊に軍事畫美人
畫の二技に於ては當代無双の妙手と許さる、武内桂舟氏丹精を凝らして獨力之に當り、加
ふるに怪奇勇壯の筆を以て文界に鳴る江見水蔭氏の記事を以てし、凡そ征清の原因事情よ
り内外の出師進軍、海陸の大戦、輜重、衛生并に清韓兩國の風俗景色等總て妙畫と奇筆とを
以て之を傳ふ、實に當世得易からざるもの、又た必らず家々千秋の珍寶たるべし幸に御愛看
あらんとす

第壹卷
十月廿五日發兌

寫眞彫刻銅版
目次

- 大日本天皇陛下。朝鮮國王。清國帝
- 第一軍司令官陸軍大將 山縣有朋 伯
- 征清師團 長陸軍中將 野津道貫 君
- 海軍々令部長海軍中將 樺山資紀 君
- 聯合艦隊司令長官海軍中將 伊東祐亨 君
- 大島少將平壤の役奮戰の圖 (寫眞大判)
- 萬里の長城。清國北京外廓の圖

(本編に十月改正の博文館圖書總目錄六十頁を附載す)
七

日清戰爭實記

八

每月三回發兌洋裝大判
定價 一冊(百廿頁)金八
五錢 拾貳冊前金八拾五錢
卅六冊前金二圓三拾錢
郵稅一冊一錢五厘少

寫真彫刻銅版口繪目次

- 第一編 有栖川陸軍大將宮 樺山海軍々々令部長 川上參謀本部次長 野津廣島師團長 大島陸軍少將 朝鮮國王殿下 大院君 金安集君 朴泳孝君 金玉均君 日清韓三國略地圖
- 第二編 小松陸軍大將宮 山縣陸軍大將 大山陸軍大將 西郷海軍大將 伊東聯合艦隊司令長官 豊島海戰の圖(生巧館彫刻西洋木版)
- 第三編 東城凱旋式之圖 豊島海戰の圖(生巧館彫刻西洋木版)
- 第四編 伊藤内閣總理大臣 陸奧外務大臣 大島特命全權公使 李鴻章 袁世凱 丁汝昌 朝鮮國王宮 東西南北四門 清國最大軍艦定遠號鎮遠號 清國軍港旅順口灣内之全景(寫真大判)
- 第五編 北白川陸軍中將宮 山地東京師團長 佐久間仙臺師團長 桂名古屋師團長 黒木熊本師團長 清國買起勝 張子珩 盛宣懷 王得勝 成歡大捷分捕品(寫真大判)
- 第六編 尚澤軍事内局長官 立見征清第一旅團長 野村高千穂艦長 坂元赤城艦長 清國吳育仁 桂嵩慶 聯芳 庭昌 清國首府北京外廓之圖 朝鮮平壤府及大同門 牡丹台浮碧樓 箕子井田 大同江海鴨山 鐵島之景 大日本皇帝陛下 清國大總統 朝鮮國王 英國女皇 獨逸皇帝 露國皇帝 奧國皇帝 佛國大統領 米國大統領 兒玉陸軍少將 小川征清 第一軍參謀長 石野野戰衛生長官 野田野戰監督長官 黃海戰勝ノ松島艦 橋立艦 嚴島艦 扶桑艦 高千穂艦 千代田艦 比叡艦 赤城艦 西京丸(外三艘ハ第二編ニ掲出セリ) 朝鮮北漢山外廓 迎恩門 開城府 海州府 黃州府 鳳山之眞景

中川忠英君輯

清俗紀聞

全六冊唐裝

木版密畫入

正價七拾五錢

郵稅拾六錢

幕臣中の俊傑長崎奉行中川飛彈守か隣邦支那の風俗土宜の詳を知らんと欲して拮据編纂したるもの、尤も精密を極む、その目左の如し

年中行事 九圖 居家 二百六圖 冠服 六十圖 飲食 十四圖 閨學 二十圖 生日 二十圖 冠禮 十一圖 婚禮 九圖 賓客 十一圖 朝旅 六圖 喪禮 八圖 祭禮 十五圖 僧徒 三十圖

臥龍逸士纂評

明治軍人譚

全一冊洋裝

正價十六十錢

郵便稅四錢

明治の聖世、文武并興る、而して武人忠勇の美談尤も傳ふるに足るものあり、此書録する所豪警奇捷、壯絶快絶の觀を極む、一部の好尚武史談あり

九

博文館編輯局立案 富岡永洗君密畫

十

支那征伐雙六

石版極彩色摺
鮮明美麗
正價金二拾五錢
豫約二拾錢郵稅四錢
前金

豫約期限十一月十日

期限後ハ正價ニ復ス

十一月十日出版

支那征討は 文明と野蠻との衝突にして、由來歐米の蔑視した大日本帝

國富強の實勢力を示し、國威を海外に宣揚し、朝鮮の獨立を鞏固にし、支

那をして優に歐米と對峙せしむるに至るの一大關門なり、而して戰闘中に於ける最後の

大凱旋に至るまでの間特に新奇妙案を擬して此双六を製し、之の忠愛

勇武の氣尚を鼓舞して兒童を裨益せんとす

地方ハ送費ヲ受申シ可ク
特別廉賣金四錢
東京博文館發兌

29
112